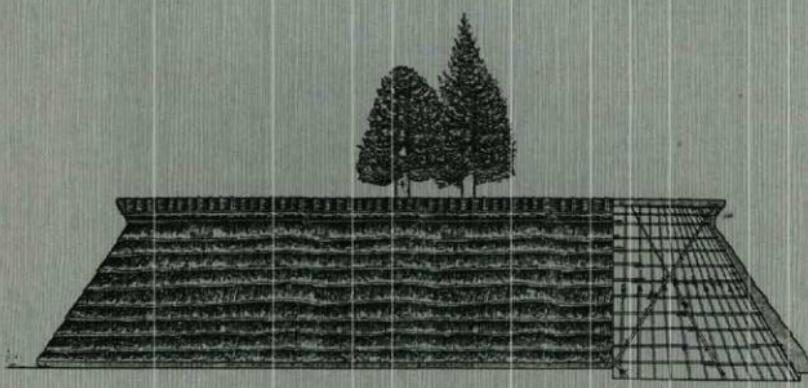


K-542

米沢市埋蔵文化財報告書 第46集

窪平遺跡

第Ⅰ次・第Ⅱ次発掘調査報告書



HY5の復元図

平成6年3月

米沢市教育委員会

窪平遺跡

第Ⅰ次・第Ⅱ次発掘調査報告書

平成6年3月

米沢市教育委員会

序 文

本報告書は、遊具広場造成に係わる緊急発掘調査として、米沢市教育委員会が平成4年の1次調査と平成5年の2次調査の二回にわたって実施した対平遺跡の調査成果をまとめたものです。

調査では、縄文前期初頭の集落が発見され、大型住居跡や立石造構、三脚石器などが検出されています。中でも、大型住居跡は全長26mを有するもので、巣状撲糸压痕文が出土したことから、今、全国的に注目されている一ノ坂遺跡よりも一段階古い住居跡であることが判りました。

一ノ坂遺跡は、石器を製作していた工房集落で、我国最長の43.5mの竪穴住居跡などが発見されています。こうした中において、一ノ坂遺跡の以前に大型住居跡が確認されたことは、当地、米沢の縄文前期社会の変遷を示すものとして高く評価されます。本市教育委員会は、その重要性に鑑み、関係機関との協議の上で、大型住居跡を現状のままに保存し、将来の活用を考えております。

今後は、より一層の文化財愛護の精神に基づき、貴重な遺跡・造構に関しては、開発機関との調整を図りながら、積極的に埋蔵文化財の保護保存に努めてまいる所存です。

最後になりましたが、発掘調査にあたり格別のご協力、ご指導を賜りました文化庁、山形県教育庁文化課、特別養護老人ホーム「成島園」、戸内 超氏、地元の皆様に対し、心から御礼を申しあげます。

平成6年3月30日

米沢市教育委員会

教育長 小口 亘

例 言

1. 本報告書は、米沢市教育委員会が、上杉の森整備事業(仮称)・遊具広場造成工事に伴う緊急発掘調査として、平成4年に実施した第Ⅰ次調査と、翌、平成5年度の第Ⅱ次調査の2カ年の発掘調査の成果をまとめたものである。

2. 遺跡の所在地は下記の通りである。

第Ⅰ次調査地区 米沢市広幡町成島字2,107-54地内

第Ⅱ次調査地区 米沢市広幡町成島字2,107-53地内

3. 調査期間

第Ⅰ次調査 平成4年10月26日～同年12月18日

第Ⅱ次調査 平成5年5月17日～同年7月20日

4. 調査体制

第Ⅰ次調査

調査主体 米沢市教育委員会

調査総括 木村 琢美(文化課長)

調査担当 手塚 孝(文化課文化財係主任)

調査主任 月山 隆弘(文化課文化財係主事)

調査補助員 鈴木 由美子

作業員

原 三郎 島 貫六助 加藤 三郎

柳町昌孝 武田房次郎 諸橋正一

中島国雄 穴沢茂雄 松本三郎

富樫福次 菊地芳子 石井よそ子

我妻卯吉 斎藤 進 北原輝栄

丸山トシコ 水野 哲

事務局 我妻淳一(文化課補佐)

小林伸一(文化課文化財係長)

平間洋子(文化課文化財主事)

調査指導 文化庁 山形県教育庁文化課

調査協力 戸内超 特別養護老人ホーム

第Ⅱ次調査

調査主体 米沢市教育委員会
調査総括 木村 琢美（文化課長）
調査担当 手塚 孝（文化課埋蔵文化財係主任）
調査主任 月山 隆弘（文化課埋蔵文化財係主事）
作業員 穴沢 茂雄 穴沢 すづ 井上 吉栄
岩野 敏雄 加藤 久雄 菊地 芳子
斎藤 辰雄 佐藤 栄吉 鈴木 とも
富樫 福次 平野 洋子 平間 深
柳町 昌孝
事務局 我妻淳一（文化課補佐兼埋蔵文化財係長）
調査指導 文化庁 山形県教育庁文化課
調査協力 特別養護老人ホーム

5. 掘図の縮尺は、遺構は1/60、1/120、遺物は、石器を1/1.5、土器を1/2とし、それぞれスケールで示した。ただし、遺構平面図の遺物に関しては縮尺不同である。写真図版の土器は概ね1/1.5であるが、石器に関しては縮尺を1/1.5に統一した。附図に関しては、Ⅰ次調査遺構全体図を1/80、Ⅱ次調査遺構全体図は1/160とした。図示した遺物の番号は、実測図、拓影図、写真図版の遺物と対応している。

6. 本文中の挿図の記号は、G—グリット、HY—堅穴住居跡、DY—土壙、P—堅穴住居跡の柱穴、PY—縄文期と推測される土壙状の遺構、XY—自然遺構、VY—近世・近代の遺構を示す。

7. 本調査により出土した遺物については、整理、復元し、米沢市埋蔵文化財資料室（米沢市万世町桑山200）に一括保管している。

8. 発掘調査および遺物整理について、つぎの諸氏から種々なる指導、ご助言を賜った（敬称略、順不同）。あわせて感謝申し上げる。

加藤 稔 川崎 利夫 小林 達雄 佐々木洋治 工藤 雅樹 藤沼 邦彦
丹羽 茂 吉田 博行 佐藤 庄一 佐藤 正俊 渋谷 孝雄 水野 哲

9. 本報告書の作成、編集については、手塚 孝が担当し、責任校正は我妻淳一がその任務にあたった。

本文目次

序 文	
例 言	
目 次	
第1節 遺跡の概観と調査の経緯	1
1 調査の概要	1
第2節 第Ⅰ次調査	1
1 調査の経過	1
2 検出された遺構	2
1) 堅穴住居跡	2
2) 土壙	3
3) 立石遺構	3
4) 石組遺構	3
3 検出された遺物	3
1) 石器	3
2) 土器	7
4 要 約	8
第3節 第Ⅱ次調査	9
1 調査の経過	9
2 検出された遺構	9
1) 堅穴住居跡	9
2) 土壙	10
3 検出された遺物	12
1) 石器	12
2) 土器	13
4 要 約	13
第4節 総 括	14

附 表

第1表 寒平遺跡 第Ⅰ次調査出土遺物一覧	4
第2表 寒平遺跡 第Ⅱ次調査出土遺物一覧	11

挿 図 目 次

第1図 寒平遺跡付近の地形図	15
----------------	----

第2図	窪平遺跡 第Ⅰ次・第Ⅱ次調査グリット配図	16
第3図	窪平遺跡 第Ⅰ次調査遺構平面図(1)	17
第4図	窪平遺跡 第Ⅰ次調査遺構平面図(2)	18
第5図	窪平遺跡 第Ⅰ次調査遺構平面図(3)	19
第6図	窪平遺跡 第Ⅰ次調査の竪穴住居跡変容図	20
第7図	窪平遺跡 第Ⅱ次調査遺構平面図(1)	21
第8図	窪平遺跡 第Ⅱ次調査遺構平面図(2)	22
第9図	窪平遺跡 第Ⅱ次調査の竪穴住居跡変容図	23
第10図	窪平遺跡出土石器実測図(1)	24
第11図	窪平遺跡出土石器実測図(2)	25
第12図	窪平遺跡出土石器実測図(3)	26
第13図	窪平遺跡出土石器実測図(4)	27
第14図	窪平遺跡出土土器拓影図(1)	28
第15図	窪平遺跡出土土器拓影図(2)	29
第16図	窪平遺跡出土土器拓影図(3)	30
第17図	窪平遺跡出土土器拓影図(4)	31
第18図	窪平遺跡出土土器拓影図(5)	32
第19図	窪平遺跡出土土器拓影図(6)	33
第20図	窪平遺跡出土土器拓影図(7)	34
第21図	窪平遺跡出土土器拓影図(8)	35
第22図	縄文前期初頭の土器実測図	36

図版目次

卷頭図版一	第Ⅰ次調査遺構全景・第Ⅱ次調査遺構全景	
卷頭図版二	窪平遺跡出土の土器・窪平遺跡出土の三脚石器	
第一図版	窪平遺跡 第Ⅰ次調査の発掘(1)	
第二図版	窪平遺跡 第Ⅰ次調査の発掘(2)	
第三図版	窪平遺跡 第Ⅱ次調査の発掘(1)	
第四図版	窪平遺跡出土の土器(1)	
第五図版	窪平遺跡出土の土器(2)	
第六図版	窪平遺跡出土の土器(3)	
第七図版	窪平遺跡出土の土器(4)	第十一図版 窪平遺跡出土の石器(1)
第八図版	窪平遺跡出土の土器(5)	第十二図版 窪平遺跡出土の石器(2)
第九図版	窪平遺跡出土の土器(6)	第十三図版 窪平遺跡出土の石器(3)
第十図版	窪平遺跡出土の土器(7)	第十四図版 窪平遺跡出土の土器(4)



▲ I次調査区全景（空中写真）



▲ II次調査区全景（空中写真）



▲出土土器



▲出土三脚石器

第1節 遺跡の概観と調査の経緯

1 遺跡の概要

本遺跡は、標高 457m の石切山丘陵から東に延びる舌状台地に存在し、東西 500m、南北 1km の約 50 万 m² の範囲に拡がっており、単独の遺跡としては米沢最大の遺跡となる。遺跡は、標高 295m 前後の第 1 河岸段丘と標高 275m の一段低い第 2 河岸段丘に分布しており、発掘調査の対象となる箇所は第 2 河岸段丘上に相当する。また、隣接する北側には、三脚石器で全国的に有名な成島遺跡、谷をへだてた北方向 900m の山頂には、米沢最大の 60m の前方後円墳 1 基を含めた 6 基の成島古墳群、20m の方形土壇を有する三月在家塚、南には長井、伊達、上杉の歴代領主が守護した成島神社を中心に土壙と空堀で構成する中世の館跡が存在している。

さらに、西山麓から丘陵にかけては切石の石垣をもって山城を構築した矢子山城跡；矢子大向 A～C 遺跡、経塚山館跡等が分布しており、東の八幡原遺跡群と並ぶ西の成島遺跡群として注目されている。

このように、歴史的に注目される箇所ではあるが、遺跡群の一帯は、昭和 50 年頃から老人ホーム（成島園）やリゾート造成等の開発が行われてきた所でもある。

遺跡の年代は、繩文早期から前期、中期と奈良時代、中世を加えた複合大集落跡で、便宜上、成島館跡、成島遺跡と区画しているが、遺跡の分布状況と年代から想定すれば、同じ遺跡の範囲に加わるものと考えられる。従って、寛平遺跡に係る遺跡の総面積は 60 万 m² を有するものと推測される。

調査は、米沢市が進めている「ラブ・アンド・ヘルシーアルカディア」構想の一環となる『最上川・上杉の森』余暇増進ゾーン整備事業の成島遊具広場（仮称）造成工事に伴う緊急発掘調査として行うものであり、平成 3 年 7 月 31 日から 10 間にわたり開発予定地を対象とした試掘調査を実施し、開田によって破壊された箇所を除く、北側と南側の約 7,000 m² の範囲に遺構が存在していることが判明している。

米沢市教育委員会では、発掘調査の範囲が広大なことから関係機関と協議をしながら本調査を 2 カ年計画として、平成 4 年度は南側第 I 次調査区 2,500 m²、平成 5 年は北側の第 II 調査区 4,500 m² を対象に発掘調査を実施したものである。

第2節 第 I 次調査

1 調査の経過

調査は、重機による表土の剥離から開始し、並行してグリットの設定を 10 月 26 日から行った。グリットは、8 m × 8 m を基本に東西 4 グリット、南北 7 グリット 1,795 m² を設定した。27 日からは面整理と遺構確認のための精査を同時に進めたところ、調査区の東側に竪穴住居跡と推測される長方形の土色変化が認められたことから、HY 5 と命名し、30 日からは遺構の掘り下げを開始した。

HY 5 は面整理の結果、他に HY 9、HY 15、HY 16 の各住居跡が切り合っていることが判明し、住居跡の南に隣接して大型の土壙 4 基も存在することが判った。さらに、一段下った各グリット内には主な遺構は認められなかったが、ほぼ中央の土壙内に立石を有する祭祀遺構 2 基と石臼炉 1 基が検出されている。その他、グリットの西側にかけて風倒木の痕跡が 4 基認められた。

これらの遺構は、住居跡の切り合い関係を吟味しながら順次掘り進め、並行して土壌、風倒木、小ピットを掘り下げ、11月25日頃には全て完了した。この中で、DY1～DY3、DY12、PY23、DY13の土壌内に石器等の剥片が多量に混在していることから、覆土を取上げて水洗いを実施した。

11月30日からは、遺構のセクション図、平面図作成を進め天気の回復にあわせ、念のために旧石器の存在の可能性を調べる目的で、2m×2mの試掘グリッド12箇所(AG～LG)を設定し、50cm～1mの深さで遺物の有無を確認したが痕跡は認められなかった。その後、12月10日に空中写真撮影を実施し、残りの平面図、レベリングを行い、12月12日をもって全ての作業を終了した。

I次調査の最終的な発掘面積は1,185m²である。

2 検出された遺構

今回の第I次調査で検出された遺構は、堅穴住居跡4棟を含む土壌、小ピット、風倒木跡を加えた65基が確認されている。この中で堅穴住居跡は、ほぼ同じ箇所に4時期にわたって切り合いを有することが判明し、縄文前期初頭における住居跡の変容を知る上で注目される。ここでは、この堅穴住居跡を中心に述べてみることにする。

1) 堅穴住居跡〔第3図・第6図・附図1〕

G8～20-40の範囲にかけて認められたものであり、昭和51年頃に行われた開田によって遺構の上部が失われていたが、住居跡の切り合い関係の吟味から4棟の堅穴住居跡、4時期が検出され、古い時期から列挙すればHY9⇒HY16⇒HY15⇒HY5の変容が想定される。

HY9〔第3図・第6図〕

東西長を有する堅穴住居跡であり、調査区の北側にあたるG16-40にかけて検出された。住居跡は、隅丸方形を示すもので、住居跡の側壁に関しては、北壁を除く他はHY15の構築によって破壊されているが、壁柱の状況から判断すれば東西5.7m、南北3.8mと推測される。HY9に関する柱穴としては、P1～P24の24基である。

HY16〔第3図・第6図〕

南北長の堅穴住居跡で、西側から南側の壁がHY15によって失われている。柱穴は、40cm～60cmの間隔で配されており、P25～P53の29基で構成するものとみられ、長径5.7m、短径4.5mの隅丸方形を有するものと考えられる。

HY15〔第3図・第6図〕

G13～19-37～39にかけて検出されたものであり、短径4.5m、長径12.3mの南北長の堅穴住居跡である。住居跡のはば中央にPY30の地床炉を置き、柱穴は覆土の状況からP54～P73の20基が伴うものと推測される。切り合い関係の吟味からHY16を拡張した可能性が高く、遺物はHY5の影響もあって僅かであった。

HY 5 [第3図・第6図]

南北長を有する堅穴住居跡で、長径 25.6m、短径4.5mをなす。切り合い関係から今回確認された住居跡の中では最も新しいグループであり、北側から I Y14、PY12、PY21、DY22の4基の炉跡を持つ。炉は、中央に2基の浅い地床炉の他に、南北の両端に比較的深い土壤状の掘込みを有するのが特徴で、北端のI Y14は方形プランを示す長径183cm、短径102cm、深さ 68cm、南端のDY22は約232cmの円形プランを呈し、深さ76cmを測る。いずれも、壁面が赤褐色に焼けた痕跡を示していた。柱穴は、整柱穴を基本として長軸に対し、東側に面する柱穴よりも傾斜面にかかる西壁面の柱穴が僅かに大きくなるのが特徴であった。住居跡の床面には円形及び梢円形の浅い土壤状の落ち込み PY25、PY24、DY11、DY8、PY10、DY15、PY33、DY22、PY34の遺構が存在し、内部には多量の炭化物と少量の焼土が混入している。遺物は炉跡の周辺に集中しており、11点の三脚石器、8点の石鎌、石箇、石匙1点と剥片221点、凹石、磨石等の礫器8点、それに、蒙状燃糸圧痕文を中心とした土器片82点が検出されている。

2) 土 壤 [第3図・第4図・第5図]

住居跡の南側に隣接して存在する5基の袋状土壤と住居跡内部に付随する9基の小土壤、それに住居跡の北側G 2 2 ~ 2 6 - 2 5 ~ 3 8 の範囲に分布する7基の21基が確認されている。この中で長径2.5mのDY3を含む5基の土壤群は覆土が自然堆積状況を示すことから住居跡に伴う貯蔵穴と考えるが妥当といえる。

3) 立石土壤 [第5図]

調査区のほぼ中央のG 1 7 ~ 1 8 - 3 3 ~ 3 4 にかけて検出されたものであり、DY37とDY41の2基が存在する。この遺構は、いずれも土壤の中心に河原石を立石させた特異な遺構であり、土壤の底部、特に石の基礎面にそって多量の同一母岩による石器の剥片を埋納しているのが特徴である。この中には完形の石鎌1点と失敗作とみられる三脚石器1点も検出されている。

4) 石組遺構 [第5図]

前記の立石土壤に隣接して確認されたものであり、直径135cmの浅い掘り込み内部に円形の石囲炉を設置している。この石囲炉の中央部からは磨製の三脚石器1点、第12図68が検出されている。

3 検出された遺物

第1次調査の遺物は、堅穴住居跡等の遺構と調査区の北側に接するG 2 1 ~ 2 8 - 3 2 ~ 4 0 を主体に4,952点が検出されている。この中で中心になるのが石器であり、完成石器69点を初めとして礫器17点、剥片石器4,073点の計4,159点、土器は全てが破片であり、862点の総数5,021点が出土している。

ここでは、石器と土器に大別してその概要を述べることにする。

1) 石 器 [第10図~12図・第11図版~13図版]

第1表 窪平遺跡第I次調査出土遺物一覧表

出土地区・遺構名	石 器	土 器	礫 器
HY 9	5	25	
HY16	16	7	
HY15	6	5	
HY 5	242	82	8
DY 1	141	17	3
DY 2	739	135	3
DY 3	794	114	2
DY 4	4	4	
DY 5	4		
DY 7		4	1
DY 8	4		
DY10	1	17	
DY12			
DY13			
DY14	6	2	
DY15	2		
DY17	11		
DY18	3		
DY20	82	36	
DY21	2	1	
DY22	39	13	
DY23	11	3	
DY24	1	4	
DY25	1	5	
DY26	6	6	
DY29	1	1	
DY30	1	1	
DY31	1	1	
DY32	25	1	
DY33	23	8	
DY37	61	24	
DY38	116	11	
DY40	70		

出土地区・遺構名	石 器	土 器	礫 器
DY41	139	7	
DY48	24		
DY49	129	17	
DY50	8		
DY60	14	5	
PY21	5	1	
PY23	3		
PY43	5		
PY44	43	2	
G12-36	9		
G16-32	14	2	
G16-40	20	8	
G20-32	169	7	
G20-36	86	5	
G20-40	14	4	
G24-32	30	2	
G24-36	179	25	
G24-40	27	2	
G28-32	11	1	
G28-36	101	80	
G28-40	225	167	
合 計	4,073	862	17

○ 完成石器。石鎌18点・未完成石鎌7点・
 尖頭状石器7点・石匙1点・
 石匙未完成3点・石箆状石・
 器10点・スクレーパー2点・
 磨製石斧2点・石錐2点・
 三脚石器17点。
 計69点。『總数5021点』

石器の形状から次ぎの5形態に分類される。

○ a群石器〔1~24〕

石鎚に分類されるもので、基部と全体の形状からさらに4類に細別する。

a群1類〔1~4〕

4点ある。先端部を頂点として、両側と基部が僅かに内湾する二等辺三角形のが基本形態であり、断面形態が極端に薄く仕上げるのが特徴である。

a群2類〔5~7〕

3点出土している。緩やかに内湾する基部から先端に円弧を描くような二等辺三角形を示すもので、先端部で極端にすぼまるのが特徴といえる。

a群3類〔8・9〕

基部が内湾した二等辺三角形の石鎚ではあるが、基部の両端が丸みを有するのが特徴と言える。ただし、全体の剥離調整が難であることから、後述するa群4類の未完成段階とも考えられる。

2点ある。

a群4類〔10~18〕

基部が著しく内湾、もしくは抉りを有する石鎚のグループで、9点ある。この仲間には基部が円弧状に調整する11・17や「へ」字状の基部をもち、先端部が細身を示す12・13・14と破損及び失敗品と推測される15・16・18も一括した。

a群5類〔19~24〕

石鎚の未完成段階の石器で、6点ある。平坦な基部を有する19~22と基部が丸味をなす23・24がある。

○ b群石器〔25~31〕

俗に尖頭状石器と呼ばれる石器であるが、一ノ坂遺跡の石器の分析では石鎚の製作断念型の可能性が指摘されるが、一応ここでは区別しておく。ただし、29に関しては石槍の失敗品とみる。

○ c群石器〔32・33・35・36〕

石匙の製作途上及び失敗、断念品とみられる。4点出土した。この中の35に関しては、両面加工を有することから、所謂「ツマミ部をもつ石鉈」の可能性がある。36は横型の石匙と考えられる。

○ d群石器〔34〕

使用痕跡の明瞭に示す前期特有の縦型石匙で、全体の形状が細身で刃部が平坦化していることから石器の再加工を繰返した最終段階の形状とみられる。

○ e群石器〔37~41・43~48〕

笠状石器を一括した。形態から次ぎの3類に細別した。

e群1類〔37・43・47〕

両面加工の笠状石器で、37は破損しているものの細身で刃部が平坦、43は刃部が円弧を有し、

基部が尖頭状をしめすもの。47は刃部が水平で、基部が43と同様に尖頭状を呈している。3点ともに形状が分かれるが、50点程出土しているニタ俣A遺跡の例と比較すれば、基本的な形態に属し、むしろ打製石斧の仲間に分類される。

e群2類〔38・39〕

2点ある。片面加工の石鎧で、刃部が緩やかな円弧をなすのが特徴である。

e群3類〔40・41・45・44〕

4点ある。刃部が平坦な石鎧の仲間で、片面加工と両面加工の2者が含まれている。この中で、40は基部と刃部の比率が少ないので特徴で、他は基部が狭く、45のように尖状を示すものもある。

○ f群石器〔42・48・50〕

スクレーバーの仲間を一括した。3点ある。50はエンド・スクレーバー、42はサイド・スクレーバーに分類されるが、48に関しては、石鎧の未完成とも考えられる。

○ g群石器〔46・51〕

磨製石斧で2点ある。いずれも基部が破損したもので、46は刃部が僅かに円弧を示すもの。51は円弧の顕著な「ハマグリ」状の刃部を有する。

○ h群石器〔53～69〕

三脚石器を一括したもので、17点出土している。石材は硬質頁岩を中心に泥岩、安山岩、砂岩をも用いられているものもある。これらは形態的に次の7類に細別することも可能である。

h群1類〔57・62・65〕

形状が正三角形状を有し、脚の先端が尖頭状を示すもので3点ある。

h群2類〔59・66〕

形状が正三角形状を有し、脚の先端が方形状を示すもので2点ある。

h群3類〔60・63〕

形状が正三角形状を有し、脚の先端が丸味を示すもので2点ある。

h群4類〔54・55・67・69〕

三角形の二辺が極端に短軸の二等辺三角形状を示すもので4点ある。この仲間には脚の先端部が丸味や平坦のものも含まれているが、一括した。

h群5類〔56・58・61・64〕

一边が極端に狭い三角形状を有するもので所謂「二等辺三角形」状を示すもので4点ある。この仲間にも脚の先端部が丸味や平坦のものも含まれているが、一括した。

h群6類〔53〕

不定形を示す三脚石器であり、HY5のI Y14内部から出土した1点がある。

h群7類〔68〕

粘版岩製の磨製の三脚石器で、石窯炉から出土したものである。

2) 土器

第Ⅰ次調査で検出された土器は、HY5の竪穴住居跡や土壤等の遺構を主体に862点存在するが、その大半が破片であり、文様の明確なものは約250点であった。土器の主要年代は、縄文前期初頭に位置付けられ、僅かに前期末の土器群もみられた。

ここでは、吟味した78点を文様構成や文様表出技法等を中心にして述べてみたい。

○ a群土器〔第14図～20図・第4図版～第9図版〕

縄文前期初頭に属する土器群を一括した。胎土には多量の纖維と石英砂を混入するものが多く、焼成は比較的良好である。これらの土器群は、関東地方の花積下層式及び東北南部の上川名II式に併行するものであり、文様構成より次ぎの4類に分類される。

a群1類土器〔1～21・24〕

渦巻状に縄文原体を押圧した藤状撚糸圧痕文を主要文様とし、3単位の多条撚糸圧痕文を横位に展開させ、その空間をヘラ状工具で施した連続突刺文で口縁部文様帯を構成するのが特徴である。器形は波状口縁で口唇部が厚味を有するものが多いよう、同部から大きく外反しながら口縁部にかけて内湾気味に立ち上がるのを基本とする。その他には、多条撚糸圧痕文を緩やかな円弧を描きながら多条の先端を折り曲げて、鳥の嘴状に連続する24の口縁部文様帯もみられる。

a群2類土器〔22・23・25～28〕

基本的にはa群1類と同様ではあるが、主要文様となる藤状撚糸圧痕文以外の撚糸圧痕文の個所は、棒状工具で再調整し、沈線文を描きながら縄文部分を消失させている。さらに、沈線間に連続突刺文の他に多条沈線文や「ハ」状文なども加えて文様帯としている。その代表が図16の25であり、口縁部で内湾、もしくは外反する器形が多い。

a群3類土器〔29～56〕

主要文様となる藤状撚糸圧痕文は基本撚糸の3本を中心にそって巴状に回転させ、横位に展開する文様を構成するものであり、撚糸部分はすべて沈線文で消失させている。間を埋める文様は短沈線文や多条沈線文、突刺文、平行沈線文、貼付文等で施し、これまでの1・2類のような口縁部文様帯のほかに29を代表するような胸部文様帯が加わるのもこのグループである。

a群4類土器〔61～75〕

縄文文様を主体とした土器群を一括した。この仲間には、先の土器群の同部文様に属するものも含まれている。61は羽縄文を主体にした深鉢形土器であり、LR・RLの前々多条の縄6本を原体として横位に回転して施したものであり、筋の長さが0.5mmを基本としている。62～69・71・74・75に關しても同様で、LR・RLの前々多条の縄3～8本で施すものが多い。70は撚の緩いLRを斜位に押圧したもので外反する小形の深鉢形土器とみられる。72・73は土器の底部に押圧したもので、72は巴状に施し、73は同心円状に施している。

○ b群土器〔57～60・76～78〕

DY 3を中心とした土壌付近から出土したもので、土壌の上層と第2層から50点出土している。59は半載竹管で施文した山形文と平行沈線文に突刺文を加えた口縁部文様帶。56は胴部に垂下する貼付文であり、両側に沈線文を加えている。60・76・78は同一破片の土器であり、RLの前々多条の縄3本による地文に胴部から上部にかけて粘土紐による貼付文を鋸歯状及び山形に施文したもので、これらの土器群は、縄文前期末葉の大木6式に併行するものとみられる。

4 要 約

今回の第I次調査では、堅穴住居跡が確認され、ほぼ同時期における住居跡の変容が明らかとなった。住居跡は切り合い関係の結果から、HY 9⇒HY 16⇒HY 15⇒HY 5順に立替えを行ったものと推測され、東西のI期の住居跡がII期に入ると南北長の住居と変化し、III期には12.3mの大型堅穴住居跡と拡張、さらにIV期になると住居跡の南に大きく拡張し、全長26.5mの大型住居跡となる。

このことは、ある程度の長期定着を示すものであり、小規模な堅穴住居が時代背景の中で発展し、大型住居に移行する過程を意味し、縄文前期社会構造を知る上では貴重な成果といえる。また、石器工房集落跡として全国的に注目されている一ノ坂遺跡からも全長43.5mの大型住居跡が検出されており、土器の分析では、一ノ坂遺跡よりも一段階古い土器群であり、一ノ坂遺跡以前に大型住居が既に成立していたことが判明した。よって、一ノ坂遺跡との係りも注目される。

集落構成としては、検出された遺構群が、段丘の縁辺に集中して存在することから、河岸段丘の縁辺を利用して遺構を構築したものと予想され、後述する第II次調査区内でも同様な遺構分布を示すことからも示唆される。ただし、第II次調査区までの区間は、既に田開の際に破壊されており、明確な遺構の痕跡は認められなかったが、縁辺に沿う状況での直線的集落を構成していた可能性が指摘されることから、何らかの目的で構築された特異な集落跡との可能性もある。

次ぎに、検出された遺物であるが、まず土器の分析では、縄文原体の筋が0.5mmを超える大粒の縄を利用し、「第22図」の八幡原B遺跡の深鉢形土器と共通した特徴を示す。さらに第15図の土器の文様は「大石田町庚甲町遺跡出土土器」に類似しており、東北北部の土器群の特徴としてとらえることも可能である。さらに、a群2類の土器群は、主要文様となる藤状燃糸压痕文を置きながらも、他の燃糸個所は沈線文で消失させる技法「飯豊町野山II遺跡出土土器」、a群3類の土器にいたっては第1工程で施文した、藤状燃糸压痕文を沈線文で全て消失する手法になっている。この手法は、関東地方を中心とした関山式の古段階で僅かにみられることからすれば、藤状燃糸压痕文を主体とした文様表出技法の発達した文様と位置付けられる。従って、文様表出技法はa群1類土器⇒a群2類土器⇒a群3類土器と変化する過程を示すものと考えられる。住居跡はHY 5が最終段階の住居であることから、切り合い関係での遺物の出土は認められなかったが、出土土器の仲間に一ノ坂遺跡や松原遺跡で主体文様となるループ文が一切含まれていなく、窪平遺跡出土の土器群がループ文の出現する以前の主要文様であることは明確であり、前期初頭の文様表出技法を解明する上で大きな手掛かりを得たといえる。

石器としては、三脚石器が上げられる。三脚石器は、東北から日本海側に沿って、関東・中部地方からも検出されている特異な石器であるが、年代は縄文前期末頃～中期前半と考えられてきたもので、今回の窪平遺跡は、前期初頭に位置付けられることで、出現期を前期初頭に遡るものである。

第3節 第Ⅱ次調査

1 調査の経過

開発予定地の北側、約4,000m²を対象に発掘調査を実施したものである。調査は、平成5年5月17日から開始し、始めに調査区内に存在する果樹園（さくらんぼ）の立木伐採と並行して重機による表土の剥離から行った。5月19日からはグリットを設定し、昨年度（平成4年）のグリットを北に延長しながら8m×8mを基本とした。5月20日からは、調査区の北側から面整理を行い、遺構の確認を進める。この中で、土壌や小ビットが認められ、確認した順位に掘り下げを開始する。中央部のなだらかな斜面には、小礫が広がっており、この付近には遺構は認められなかった。今回の調査区では、最も高い平坦な東側においては、堅穴住居跡と推測される長方形や方形状の土色変化が認められ、急入りに精査したところ10棟の住居跡が4期の切り合いを有しながら検出することができた。

5月30日からは、この住居跡を中心に切り合い関係を観察しながら順次掘り進め、並行して土壌、風倒木、ビット等の掘り下げを実施した。6月7日からは、遺構の掘り下げを終了したグリットより、平面図の作成、セッション図作成を進め、7月16日ではほぼ終了した。7月17日には調査区全体の清掃を行い空中写真の撮影を実施した。最終的な調査面積は、3,330m²である。

2 検出された遺構

第Ⅱ次調査で検出された遺構は、縄文前期の堅穴住居跡10棟を含む141基が検出されている。ここでは、代表的な遺構を中心に述べたい。各遺構内からの出土遺物に関しては、第2表を参照されたい。

1) 堅穴住居跡〔第7～9図・附図2〕

遺構確認面が20cm前後と浅いこともあって、耕作によって著しく搅乱をうけていた。このような背景の影響で住居跡内部には、遺物の出土は極端に少なくHY1～HY10を合わせても石器31点、土器106点の計137点であった。住居跡は切り合いの吟味より、4期に分類された。古い順位から述べる。

HY1〔第7図・第9図〕

HY2に切られている。長軸6.6m、短径5.8mを有する隅丸方形の堅穴住居跡で、住居の北側は風倒木によって破壊されている。柱穴はP1～P30の30基である。

HY4〔第7図・第9図〕

HY3・HY5・HY6の3基の堅穴住居跡によって切られているもので、長径5.1m、短径4.4mのはば方形プランを呈する。柱穴は、P31～P63の33基で構成する。

HY9〔第7図・第9図〕

北側の一部が、HY7によって切られているものの、比較的明瞭に残っている。平面形状が方形プランを示す住居跡で、長径5.0m、短径4.5mをなす。柱穴は、P64～P100の37基を約30cm

~40cmの間隔で配置している。

HY8〔第7図・第9図〕

南北長の方形プランを示す住居跡で、西側をHY7の住居跡によって切られている。長径4.7m、短径3.5mを測り、柱穴は、P101P~123の23基で構成する。

HY5〔第7図・第9図〕

HY3・HY6・HY7の3基の堅穴住居跡に切られているもので、長径6.3m、短径4.8mの長方形プランの住居跡である。柱穴は、P124P158の35基で構成し、20cm~30cmの狭い間隔で配置している。

HY2〔第7図・第9図〕

東西長を有する長径4.4m、短径3.4mの住居跡で、柱穴はP159P~177の19基を配する。

HY3〔第7図・第9図〕

不整形の方形プランを有するもので、長径4.4m、短径3.6mを測る。柱穴は、P178~P207の30基を25cm前後の間隔で配置している。

HY7〔第7図・第9図〕

住居跡の北西コーナー部をHY6に切られ、HY8・HY5を切って構築している。東西長の細長い住居跡で、長径7.4m、短径3.0mを有する。柱穴は、P208~P243の36基を35cm~50cmの間隔で配置している。ほぼ中央に焼けた痕跡が認められたが、炉跡に伴うものではない。尖頭状の石器、第12図76が出土している。

HY6〔第7図・第9図〕

今回確認された住居跡では最も大きいもので、長径8.4m、短径3.2mを有する。柱穴は、P244~P288の44基で構成しており、住居跡の中央部より石範1点、第12図80と縦長石匙の未完成1点第12図79が検出されている。

HY10〔第8図・第9図〕

東側のコーナー部が未調査であるが、ほぼ方形の住居跡で、長径4.2m、短径3.4mを有する。住居跡の中央部は、風倒木によって搅乱されているが、その内部より三脚石器3点が検出された。

2) 土 壤 [附図2]

今回の調査では、調査区の北側を中心にして147基の土壤状の遺構が検出されている。平面形状が円形もしくは橢円形状を示すもので、大半の土壤からは遺物は検出されなかった。覆土の状況から推測すれば、次ぎのように分類することも可能である。

第2表 遺跡第Ⅱ次調査出土遺物一覧表

出土地区・遺構名	石 器	土 器	礫 器		出土地区・遺構名	石 器	土 器	礫 器
HY 1	4	2			G 8 4 - 4 4	1 2	3	
HY 2	2	3			G 8 4 - 4 8	1 2	1 9	
HY 3		1 2	1		G 8 8 - 4 0	9		
HY 4	1 6	2			G 8 8 - 4 8	2		
HY 5	1		2		G 9 2 - 4 0	4		
HY 6	3 4	4			G 9 2 - 4 4	2 2	5	
HY 7	1 8	1	1		G 9 2 - 4 8	2 0	1 0	
HY 8	9				G 9 6 - 4 0		1	
HY 9	2	1			G 9 6 - 4 4	4	4	1
G 6 8 - 4 0		1			G 9 6 - 4 8	8	5	
G 6 8 - 4 8	3				G 1 0 0 - 3 6	9	1	
G 7 2 - 4 0	6	4			G 1 0 0 - 4 0	5		1
G 7 2 - 4 4	4 1	6	1		G 1 0 0 - 4 4	5	7	
G 7 2 - 4 8	1 3 8	1 8			G 1 0 0 - 4 8	2 7		2
G 7 6 - 4 4	5 9	3			G 1 0 4 - 3 6	3		
G 7 6 - 4 8	4 5	3	1		G 1 0 4 - 4 0	6	1	
G 8 0 - 3 6	1				G 1 0 4 - 4 4	4	3	1
G 8 0 - 4 0	1 3	5			G 1 0 4 - 4 8	3	3 4	
G 8 0 - 4 4	5 6	3	1		G 1 0 5 - 4 4	3	1	1
G 8 0 - 4 8		1			G 1 0 5 - 4 5	1 4		
G 8 2 - 4 8	4				HY 1 0	1 5	6	
G 8 4 - 3 6		2			合 計	6 5 2	1 7 1	1 4

○ 完成石器。石鎌 6 点・尖頭状石器 2 点・縦型石匙 2 点・同未完成石匙 1 点・石箒 1 点。
三脚石器 5 点・石錐 1 点。『總計680点』

縄文期に属する土壤状の遗構。(DY記号で表示)

DY11~43・48・52・59・60・66・67・68・70・74~81・84~90・94~98・100・103~106・112~115・121~129・138・139の80基。

縄文期と推測される土壤状の遗構(PY記号で表示)

PY44~47・50・51・53・54・61~65・69・71~73・82・83・91~93・99・107~111・116~120・130~137・140~153の45基。

自然遗構(XY記号で表示)・最近の遗構(VY記号で表示)

XY44・101・102の3基。VY49・156・157の3基。

3 検出された遗物

第Ⅱ次调查で検出された遗物は、石器等の完成石器18点を初め、剥片等の石器652点、土器片171点とそれに砾器14点を含む計680点が出土している。

ここでは、石器と土器に大別してその概要を述べることにする。

1) 石 器 [第12図・第13図・第14図版]

完成石器を中心に述べる。石器の分類は、第Ⅰ次调查に順じたい。

○ a群石器〔7~75〕

石器に分類されるもので5点出土している。基部が著しく内湾、もしくは抉りを有するグールブに属するa群4類石器に含まれるが、小形で基部が緩やかな円弧を描く75・73はa群5類として区别したほうが妥当と思われる。

○ b群石器〔76~77〕

尖頭状石器としたもので、石器の未完成の可能性がある。

○ c群石器〔79〕

後述する78のような両面加工の縦型石匙(つまみを有する石鉈)の未完成と推測される。

○ d群石器〔78・81〕

石匙の仲間で、2点出土している。81は前期初頭特有の石匙で、刃部が90°を有するのを特徴としている。78は先に触れた通りで、東北地方を中心に前期中葉から前期末葉にかけて主体的に出現する石鉈の仲間である。米沢市内では、八幡原A・B遺跡、八幡堂遺跡等5遺跡からの出土例がある。

○ e群石器〔80〕

石箆状石器で、1点出土した。刃部が平坦で、基部が尖状を示すe群3類の仲間と共通する。

○ i群石器〔83〕

石錐の仲間で、83は石錐を転用もしくは両面加工の石匙の失敗品を再加工したものである。

○ h群石器〔82・84~87〕

三脚石器の仲間で、5点出土しているが、内3点はHY10の堅穴住居からの検出である。形態より、82・84は群2類、86はh群5類、85・87の2点はh群4類に分類される。

2) 土 器〔第20図・第21図・第9図版・第10図版〕

出土した171点の内53を図化した。大半が破片であり、器形や文様構成が明確に判るものは僅かである。簡単に概要を記す。

a 類土器〔79~83〕

胎土に植物性の纖維を多量に含む土器群で、79~81はLR・RLを用いて羽状繩文を施文、82は多状沈線文を施しているもので、I次調査のa群3類土器に併行するものである。繩文前期初頭に位置付けられる。

b 類土器〔84~95〕

細線状の粘土紐を器面に貼付するものと、棒状工具による沈線文を施文したグループであり、前期中葉から末葉期に属する土器群である。前者の土器群には、87の山形文、口縁部の裏側に方形状の粘土紐を貼付したもの、0.6mm幅の粘土紐をゆるやかな山形文で構成するものなどがある。

一方、後者は緩やかな波もしくは山形に沈線を描く93・94、横円もくしは方格状に沈線を胴部に施した90・92・95などがある。これらは大木4式~大木6式に併行するものであろう。

c 類土器〔96~122〕

先のb類土器群の胴部から底部にかけて施文したLR・RLの単節斜繩文片である。

d 類土器〔123~131〕

繩文中期に属する土器群を一括した。竹管による突刺文、口縁部に施文する燃糸圧痕文の124・126・127・128らは大木7式。隆線文によるもので、130は縦位に展開する「C」字状文、131は横位に展開する「C」字状文と推測され、繩文中期末葉期の大木10c式に併行するものと考えられる。

4 要 約

第Ⅱ次調査では、住居跡が10棟検出されている。切り合い関係の吟味と遺物を検討した結果、次のような変遷を有することが想定される。

- I期(関山式併行) HY1 HY4 HY9 3棟。
- II期(大木4式併行) HY8 HY5 2棟。
- III期(大木5式併行) HY2 HY3 HY7 3棟。
- IV期(大木6式併行) HY6 HY10 2棟。

以上のように4時期にわたって存在するものであるが、出土した遺物が極端に少ないとから時期区分に関しては若干問題も残るといわざるを得ない。だが、I期の住居跡は、第Ⅰ次調査においても検出されており、かなり広い範囲にわたって集落が構成されていたことを示すものもある。

さらに、II期・III期に関しては、米沢市市内でもその存在は少なく、逆にIII期に属する遺跡が急増する特質がみられる。そのような時代背景の中で、住居跡が確認されたことは、今後の繩文前期中葉から末葉期の変容を知る貴重な資料となる。遺物では、三脚石器の存在であり、HY10より3点出土している。三脚石器は、既に触れているように前期初頭から出現し、米沢市の台ノ上遺跡、成島遺跡を代表する中期中葉期、寒河江市向原遺跡の中期末期、米沢市の竹井境遺跡の後期初頭の例等からすれば、所謂石器のように各時期を通して存在するように、ある一定の年代幅を有するものと考えられる。

第4節 総括

第Ⅰ次調査と第Ⅱ次調査について述べたが、窪平遺跡のもつ重要性がさらに高まったといえる。窪平遺跡は約50万m²にも及ぶ大規模遺跡であり、南東部に大きく拡がる第1河岸段丘には縄文早期の遺跡が確認され、第2河岸段丘となる今回の調査区からは縄文前期の遺構が主体的に検出された。さらに遺跡の北側には、さらに一段低い舌状台地に沿って縄文中期を主体とした成島遺跡が存在する。このように、時期によって集落を構成する立地が変化することが判った。このことは、鬼面川の流進方向の移動に関連するものと推測される。

今回の調査で明らかとなった成果としては、大型住居跡の出現が上げられる。蕨状燃糸圧痕文を主体とする縄文前期初頭の限られた時期の間に通常の堅穴住居跡が大型住居跡に移行する経緯が確認されたことは、時代背景の中での大型住居の必要性をどのように理解するかが課題となる。

一ノ坂遺跡では、石器製作の工房跡として大型住居跡を構築し、遺跡全体が石器製作を目的に構成する工房集落であることが判明している。窪平遺跡の大型住居に関しては、その点の吟味はこれから課題となろうが、住居跡の両端に設けられた大型の炉跡は住居の機能を考える上での重要な手掛かりといえる。大型住居跡は北九州では、縄文早期に出現している。しかしながら、全国的に普及するのは縄文前期以降であり、東北から中部地方の日本海側に集中する傾向がある。

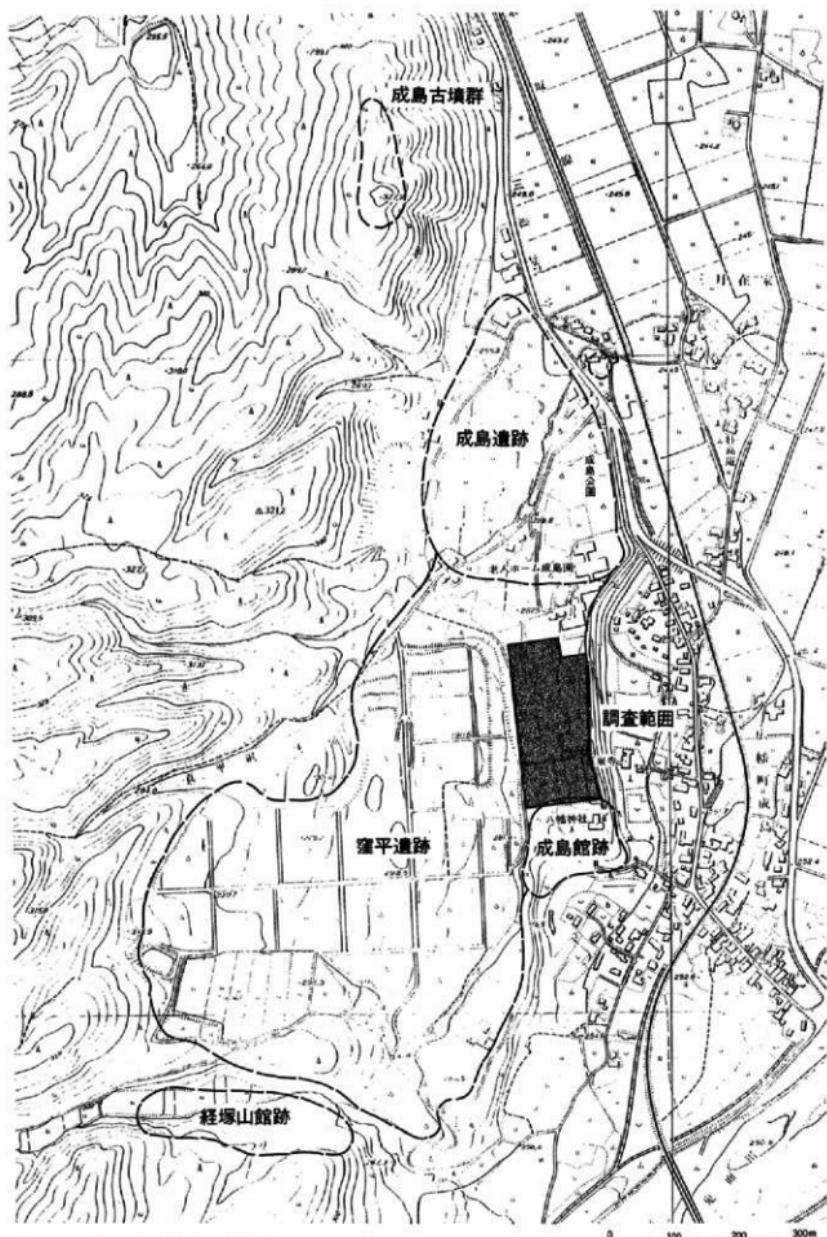
問題なのは、その機能である。大型住居跡は、ある限られた集落にのみに存在するもので、遺物が大半の場合極めて少ないので特徴でもある。前述した一ノ坂遺跡は例外で、機能についても解説していないのが現状といえる。窪平遺跡を大胆にいえば、巨大炉跡から火を利用する施設と仮に推測すれば、調理もしくは食料に関する集会場等が予想されなくもない。

次に土器群で、蕨状燃糸圧痕文の出現と消滅の問題である。窪平遺跡の住居跡の推移からすれば、時間的な年代幅は僅かであり、蕨状燃糸圧痕文の出現した直後には、次ぎの段階として部分的に沈線文によって消失する手法が開発され、さらに全面消失の技法と変化する。やがて蕨状燃糸圧痕文の施工工程を省略した沈線文を主体にした文様構成と変化すると推測される。従って、蕨状燃糸圧痕文の出現から完全消失させる技法までの時間的空間は極端に短いものと予想され、a群1類土器～a群3類土器が共存している可能性もある。事実、松原遺跡からはa群1類は存在するがa群2類・a群3類は含まれていなく、野山遺跡はa群2類土器が主体を示すなど興味ある特質がみられる。

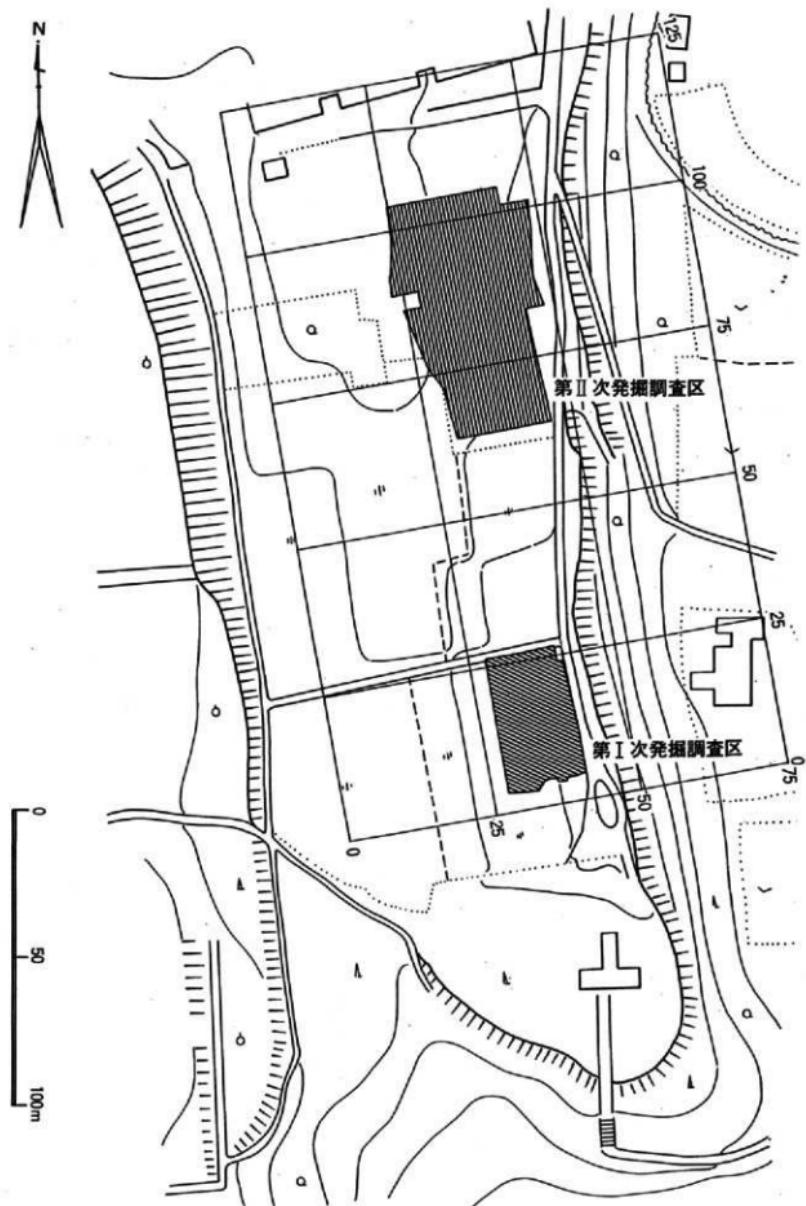
以上、簡単に窪平遺跡の成果について述べたが、米沢市には一ノ坂遺跡など数多くの縄文前期の遺跡が存在しており、それらの遺跡との関連も含め調査・研究を進めて行く所存である。

参考文献

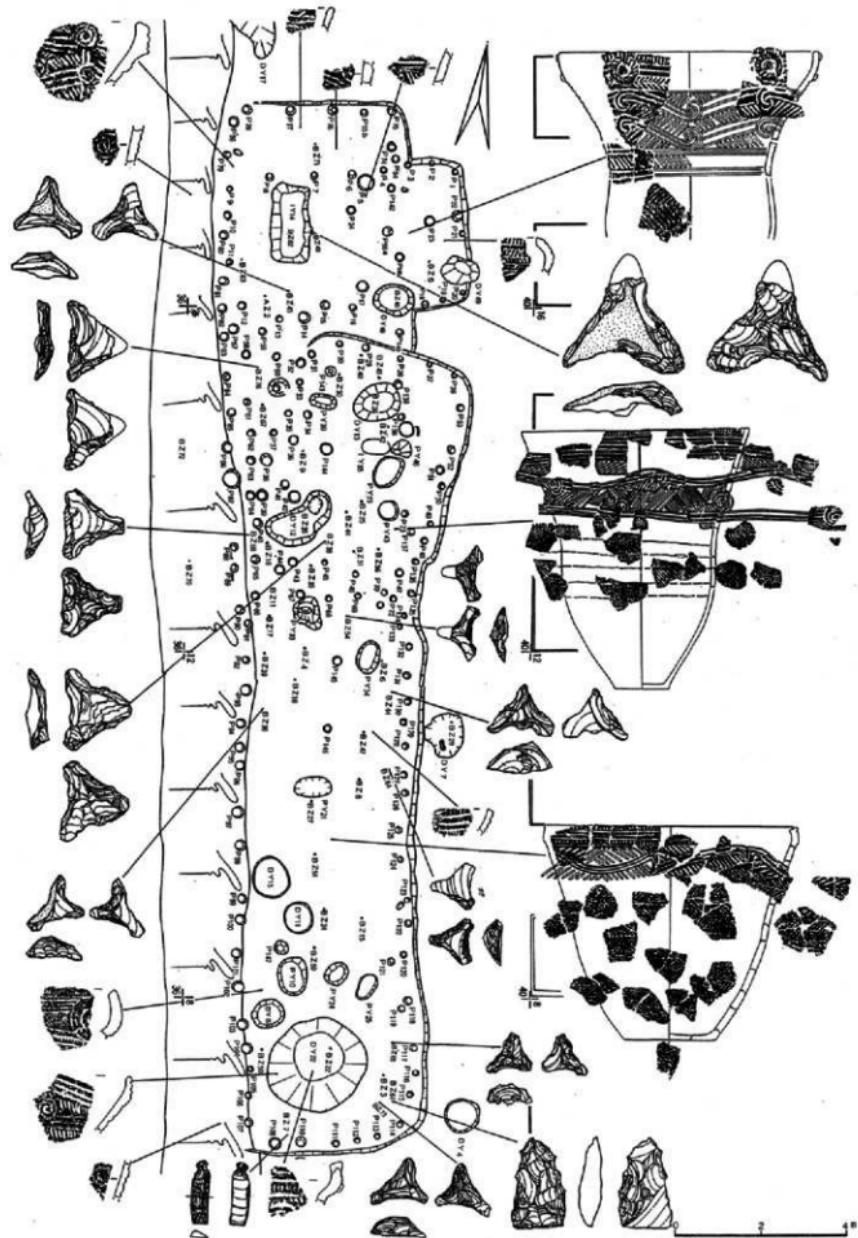
- | | |
|------------------------------------------------------|---------------------------|
| ○置賜考古学会 1977 松原 | ○埼玉県教育委員会 1974 関山貝塚 |
| ○米沢市教育委員会 1985 法将寺遺跡 | ○米沢市教育委員会 1991～1994 一ノ坂遺跡 |
| ○大石田町教育委員会 1984 庚甲町遺跡 | ○東根市教育委員会 1975 小林遺跡 |
| ○中嶋 寛 1976 大石田町庚甲町遺跡について「山大史学5」 | |
| ○米沢市教育委員会 1975～1977 米沢市八幡原中核工業団地造成予定地内 埋蔵文化財調査報告書1～3 | |



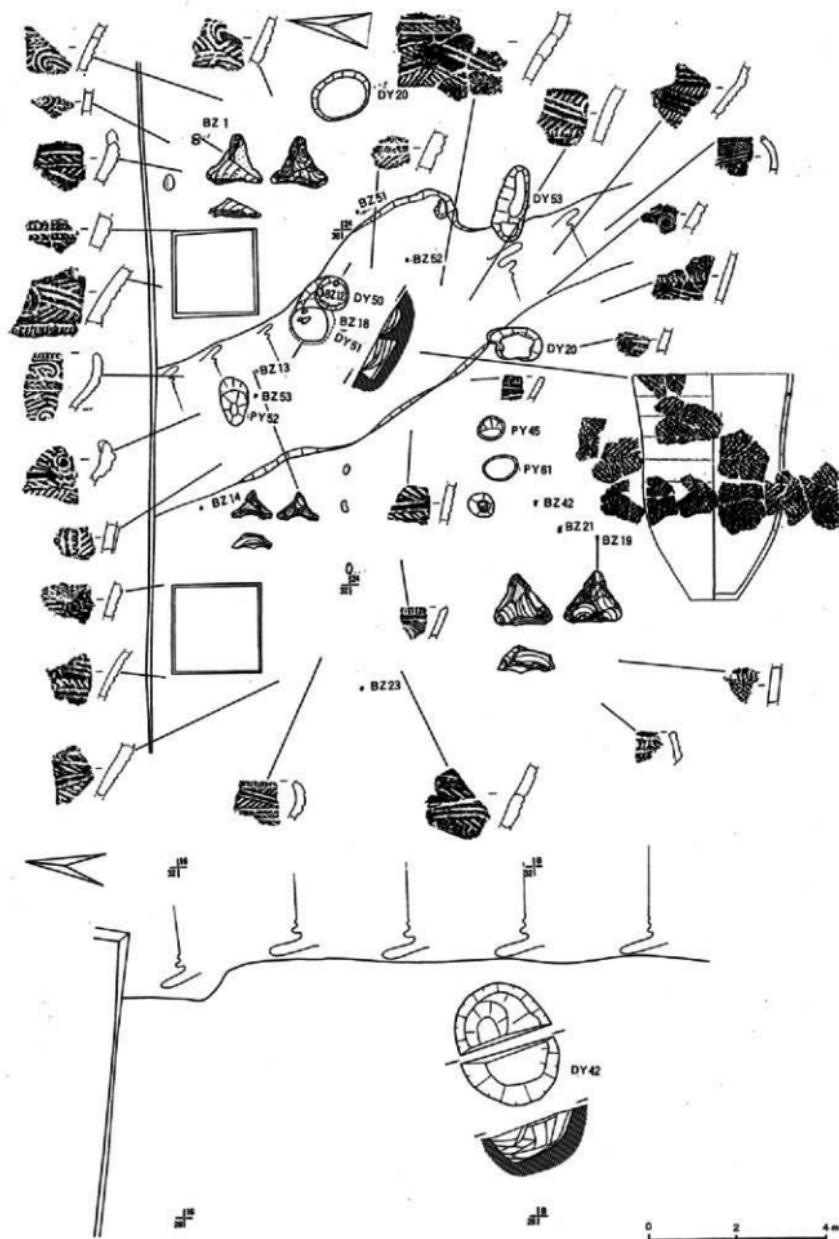
第1図 宿平遺跡付近の地形図



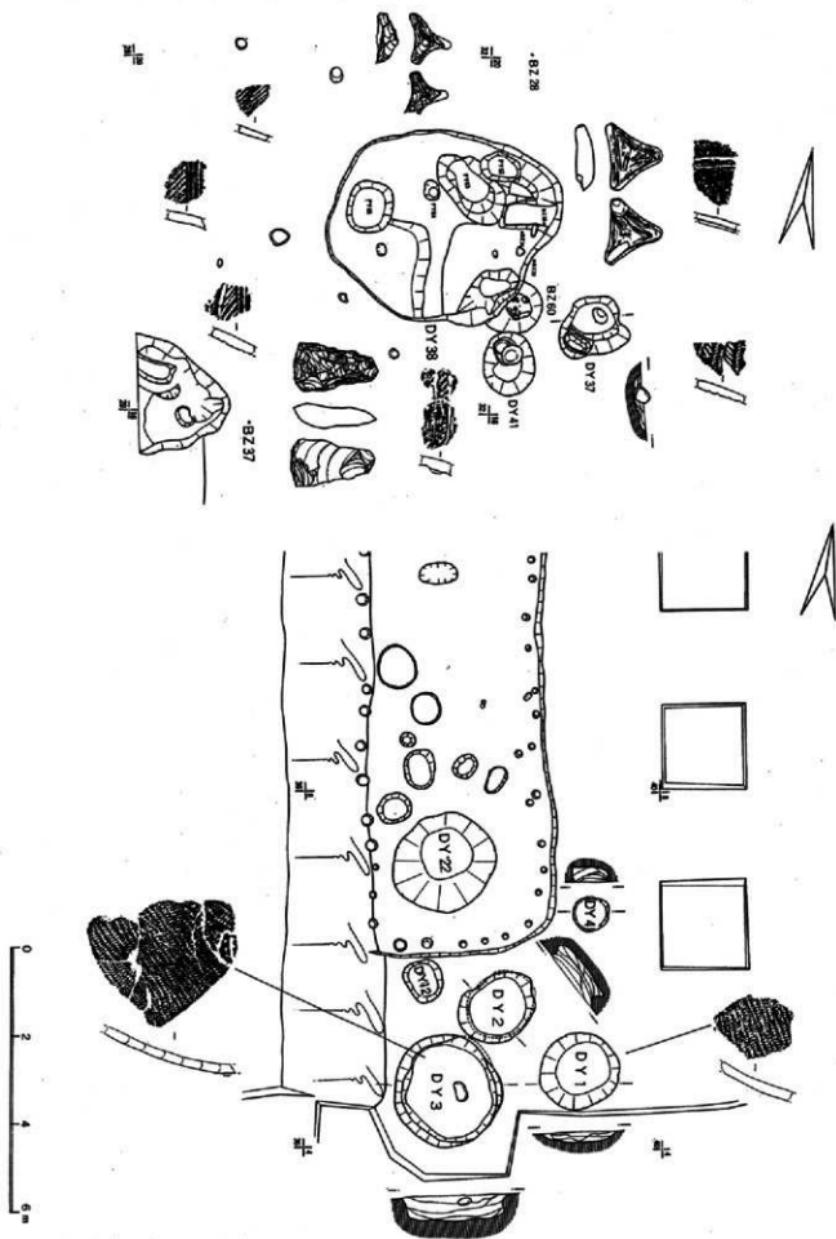
第2図 雅平遺跡第1次・第2次調査グリッド配図



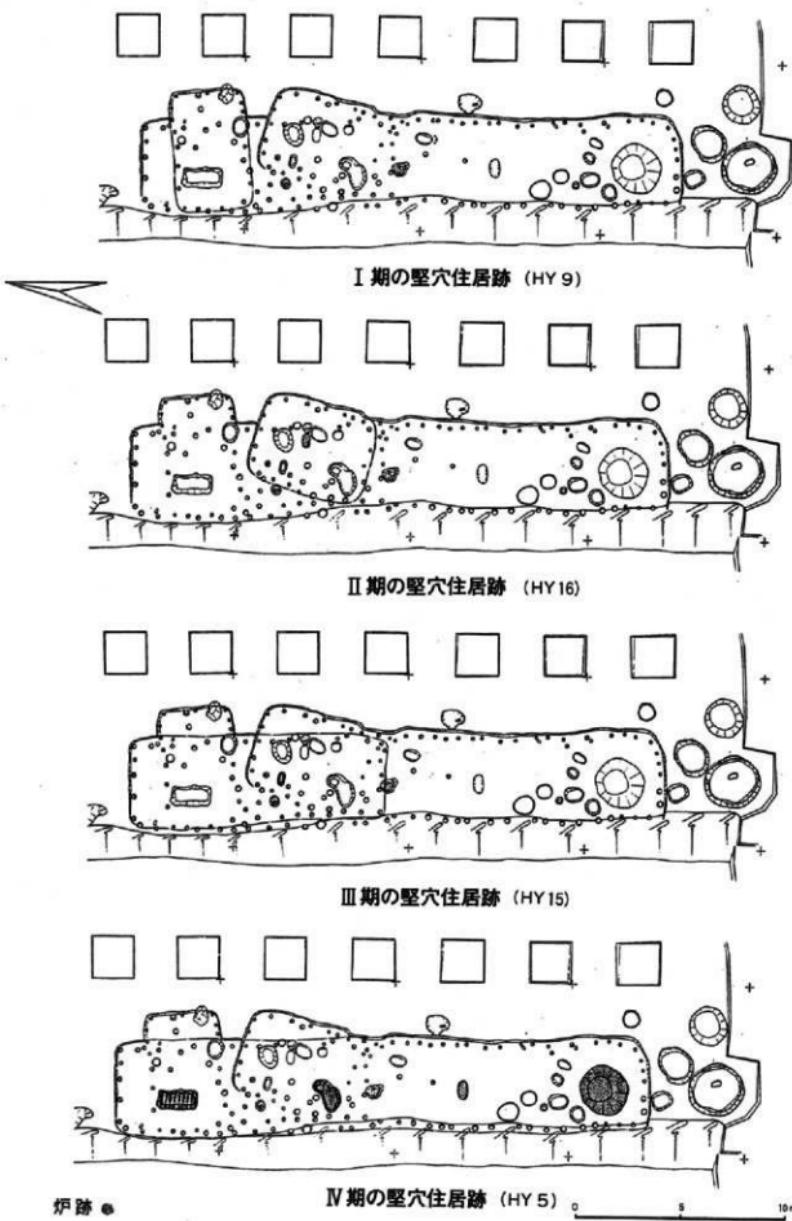
第3図 窪平遺跡第1次調査遺構平面図(1)



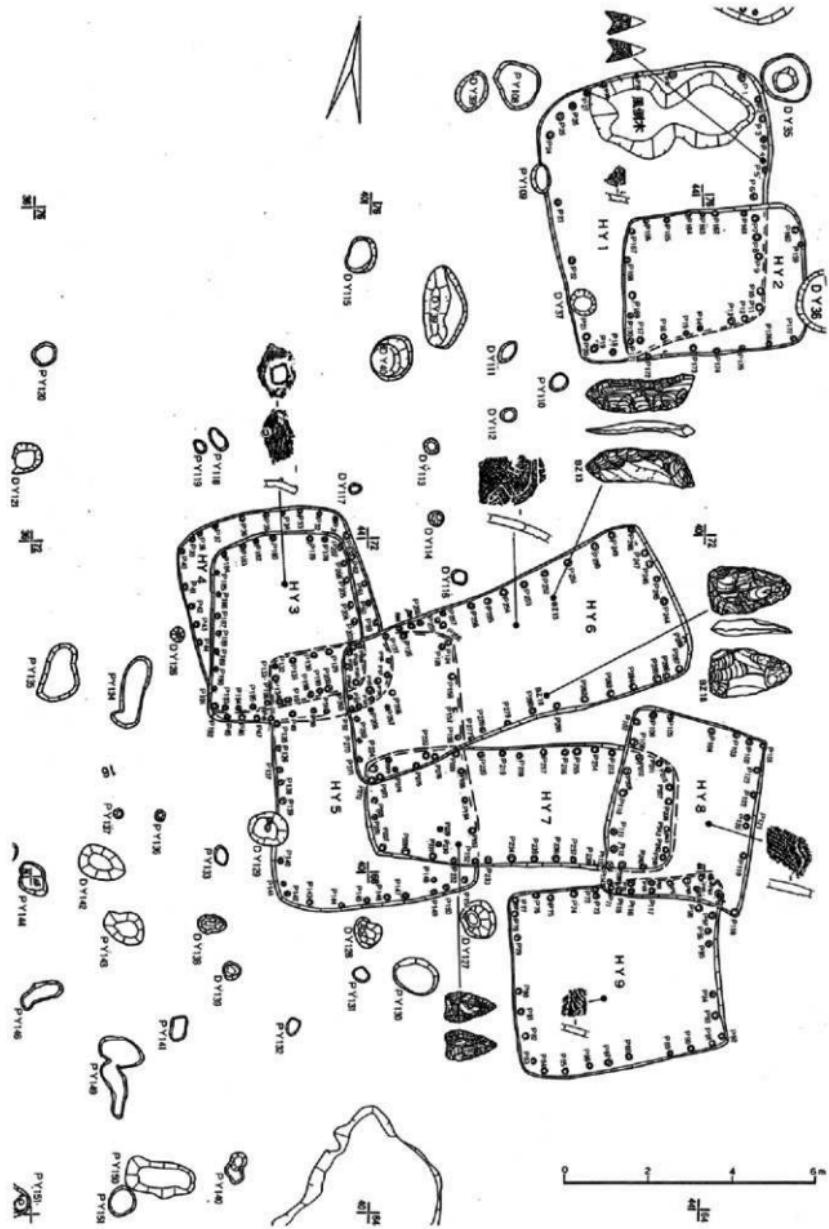
第4図 痿平遺跡第1次調査造構平面図(2)



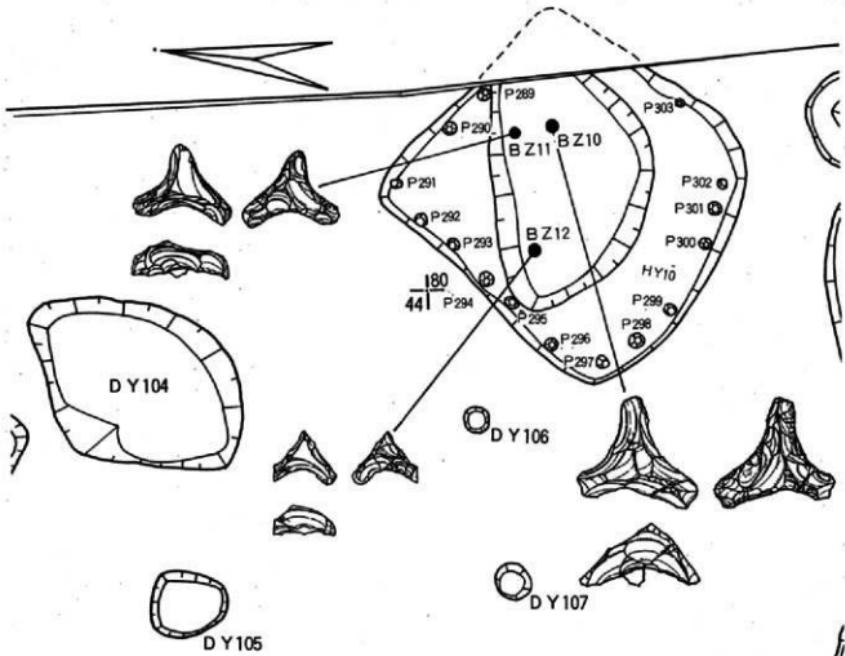
第5図 磬平遺跡第1次調査構造平面図(3)



第6図 建平遺跡第1次調査の堅穴住居跡変容図

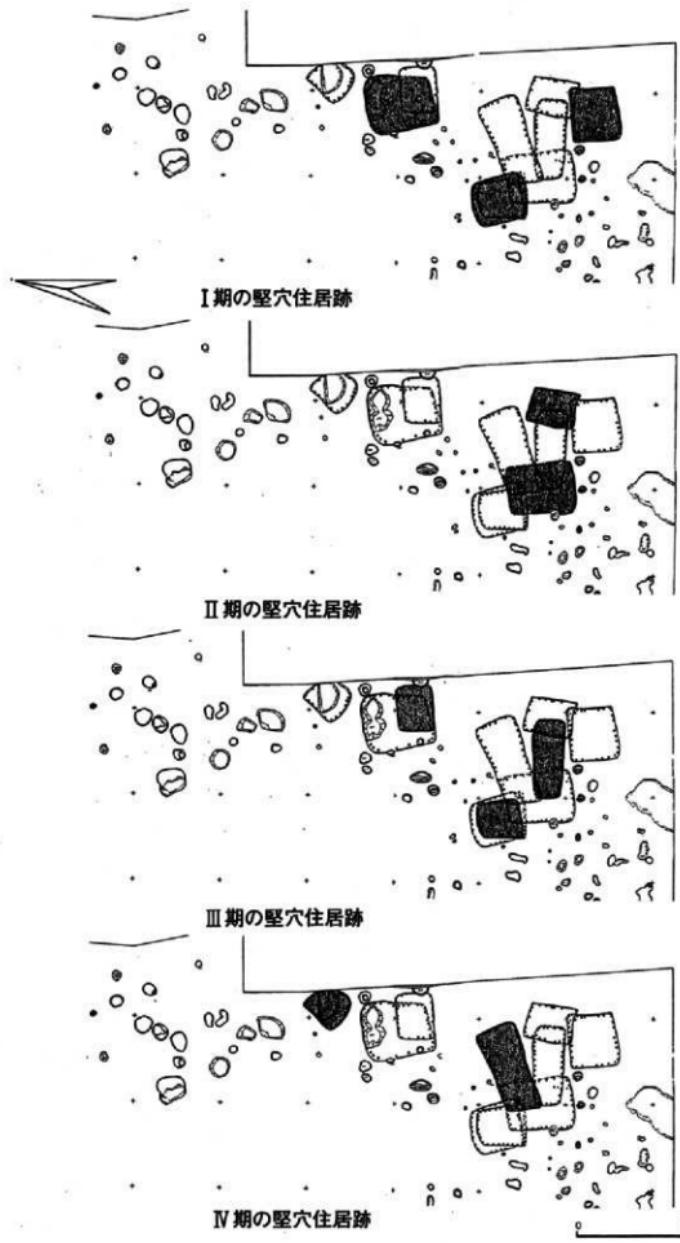


第7図 駿平遺跡第2次調査平面図(1)

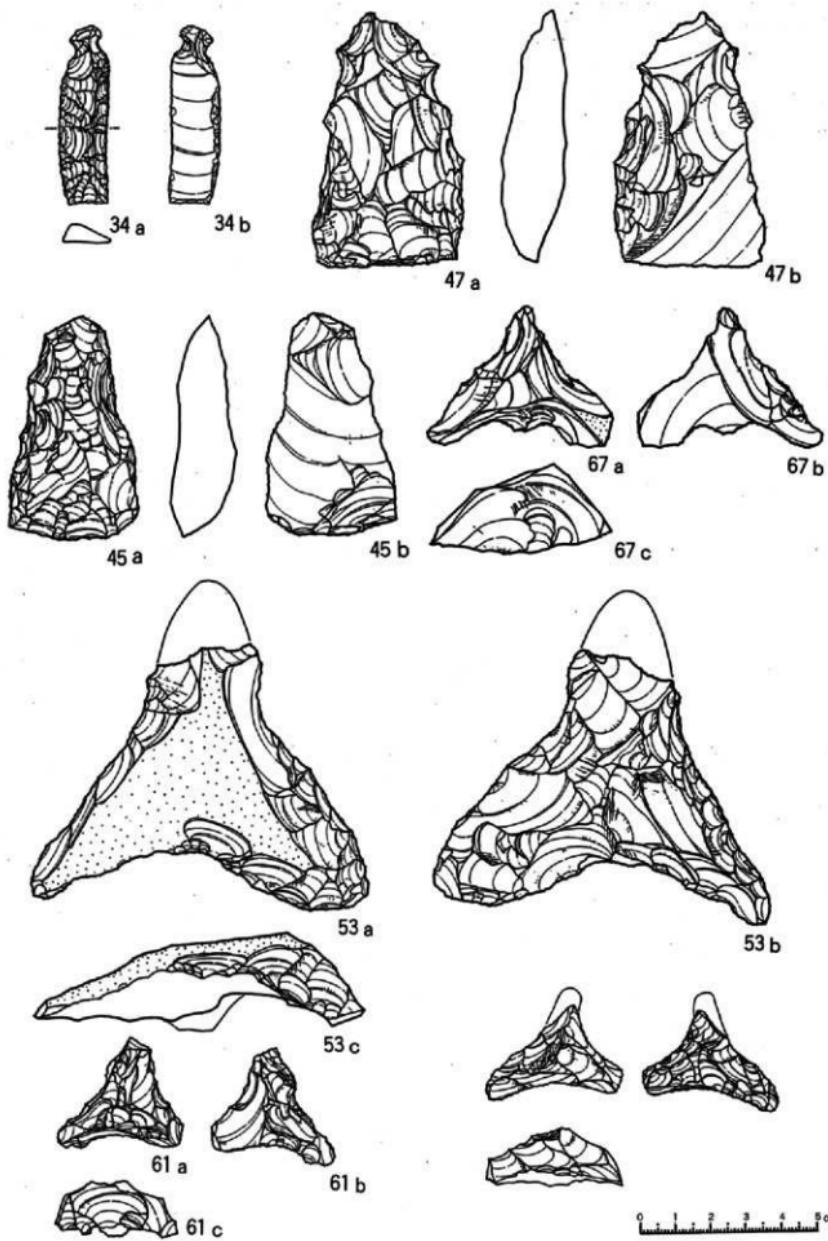


0 2 4m

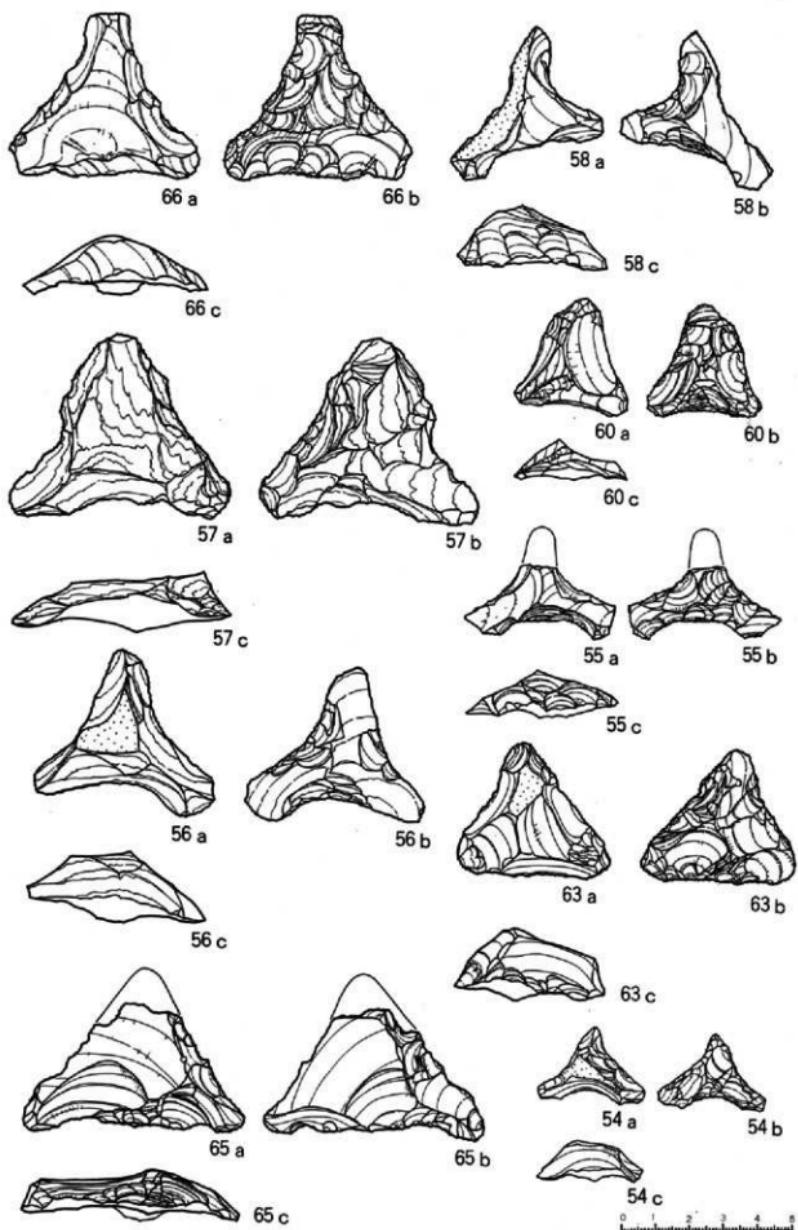
第8図 壽平遺跡第2次調査平面図(2)



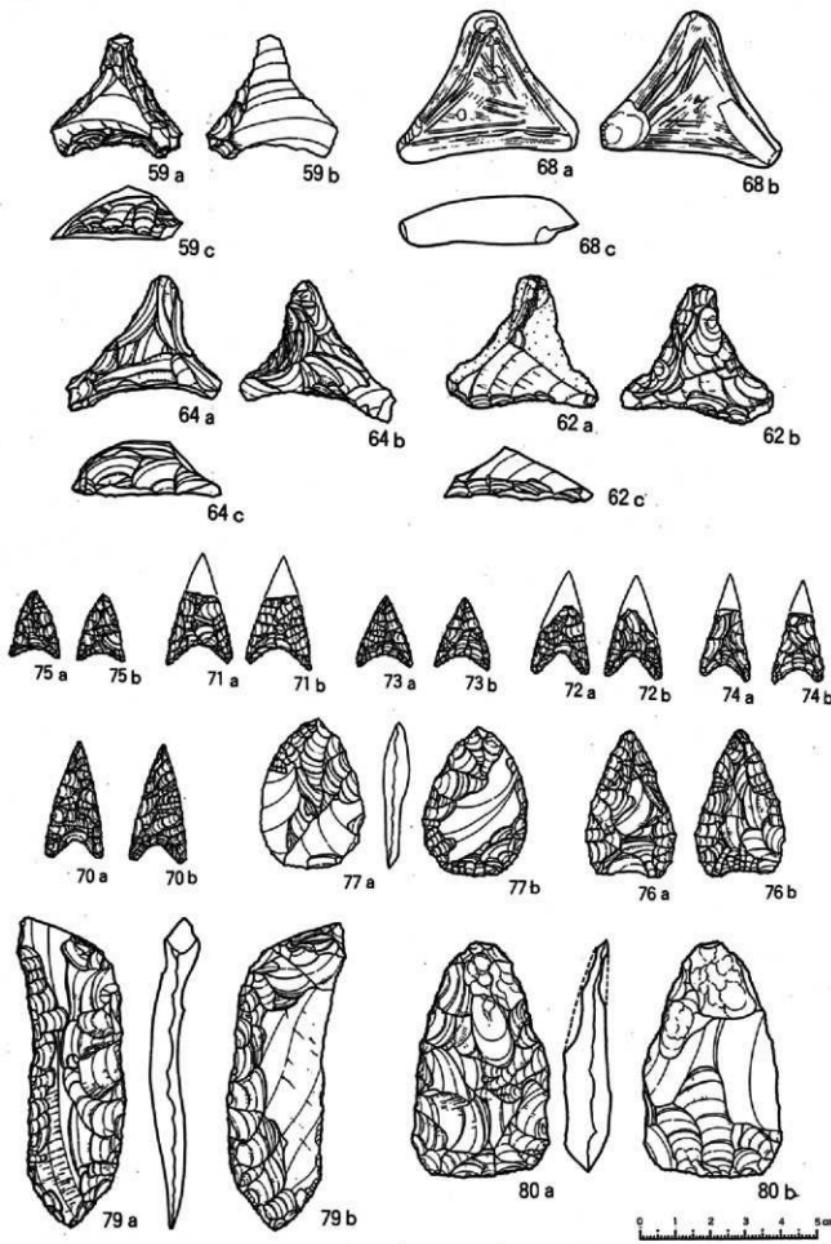
第9図 座平遺跡第2次調査の堅穴住居跡変容図



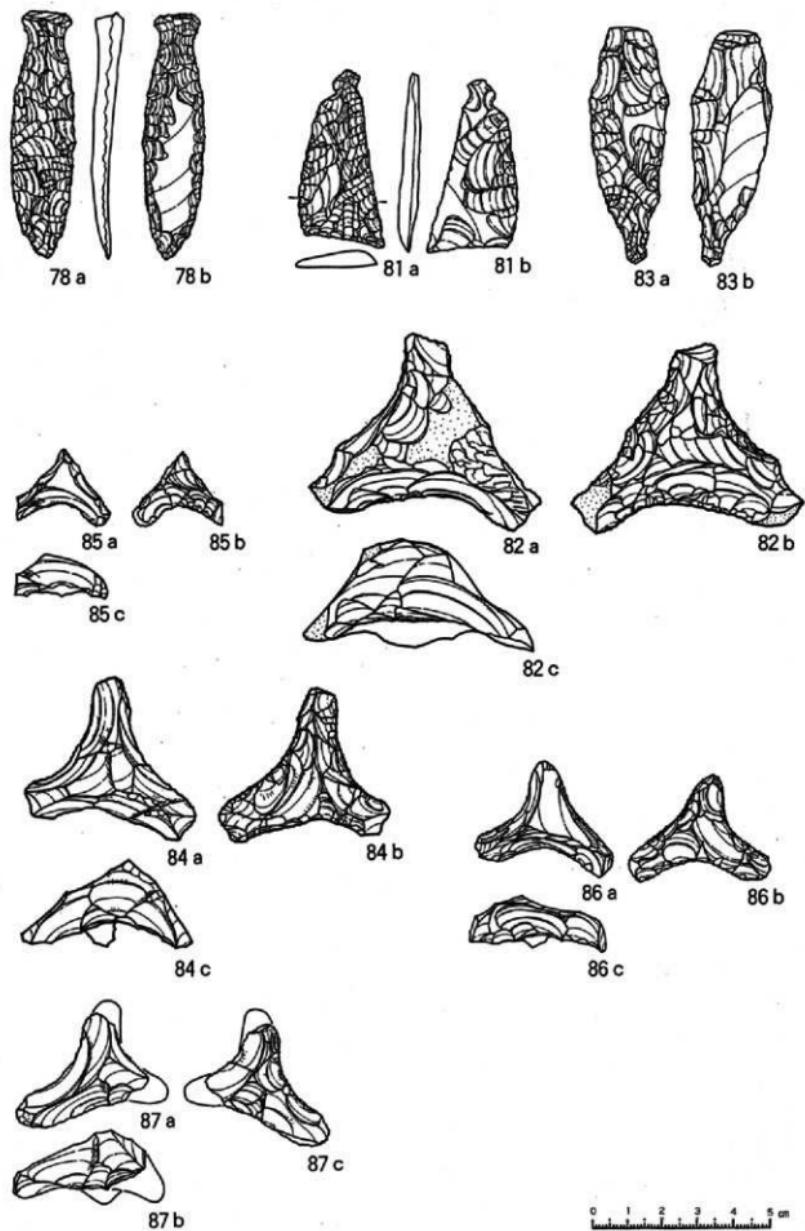
第10図 周口店遺跡出土石器実測図(1)



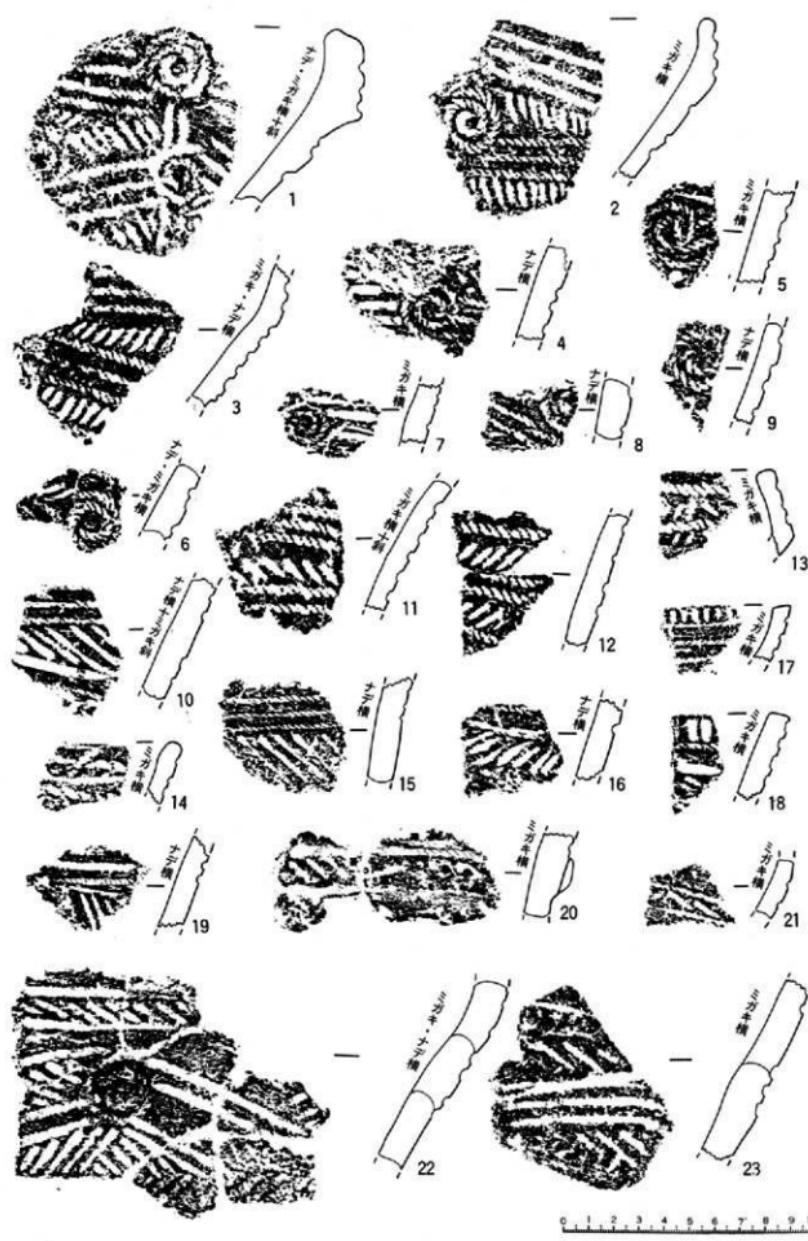
第11図 痿平遺跡出土石器実測図(2)



第12図 周口店遺跡出土石器実測図(3)

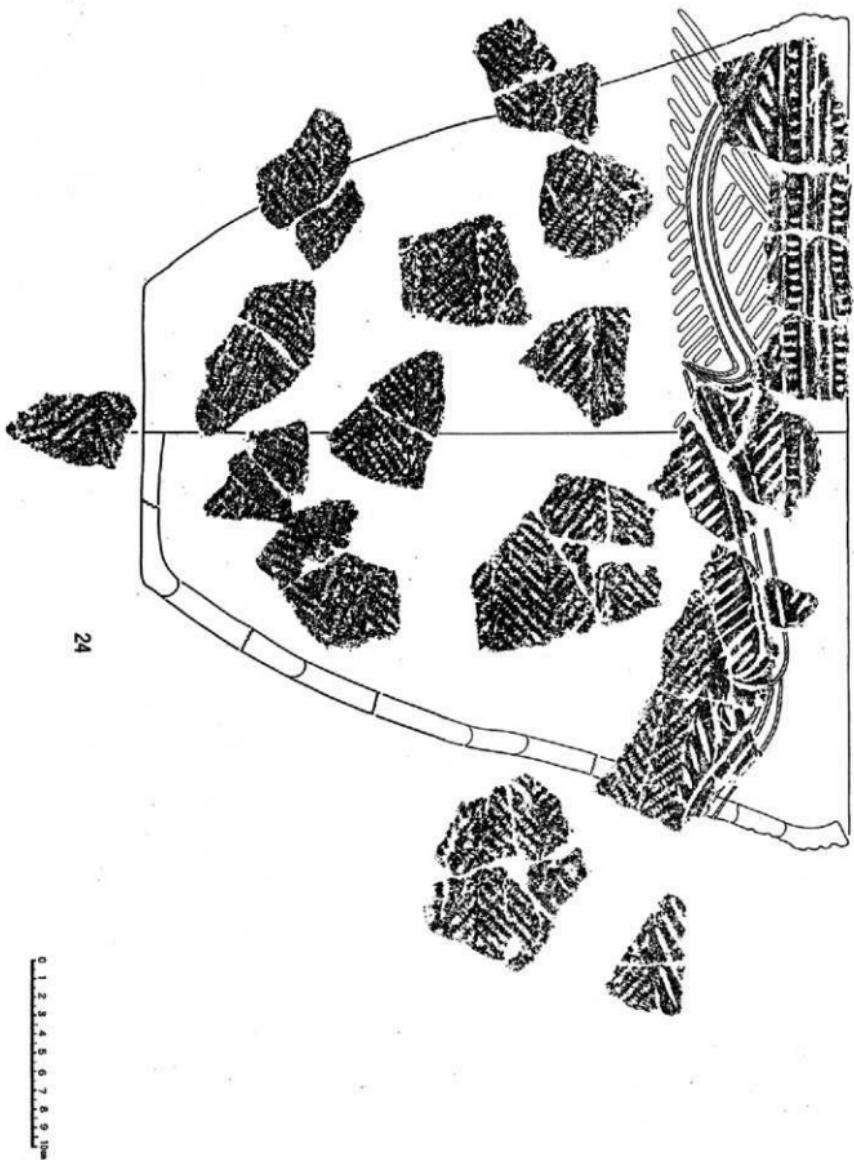


第13図 座平遺跡出土石器実測図(4)

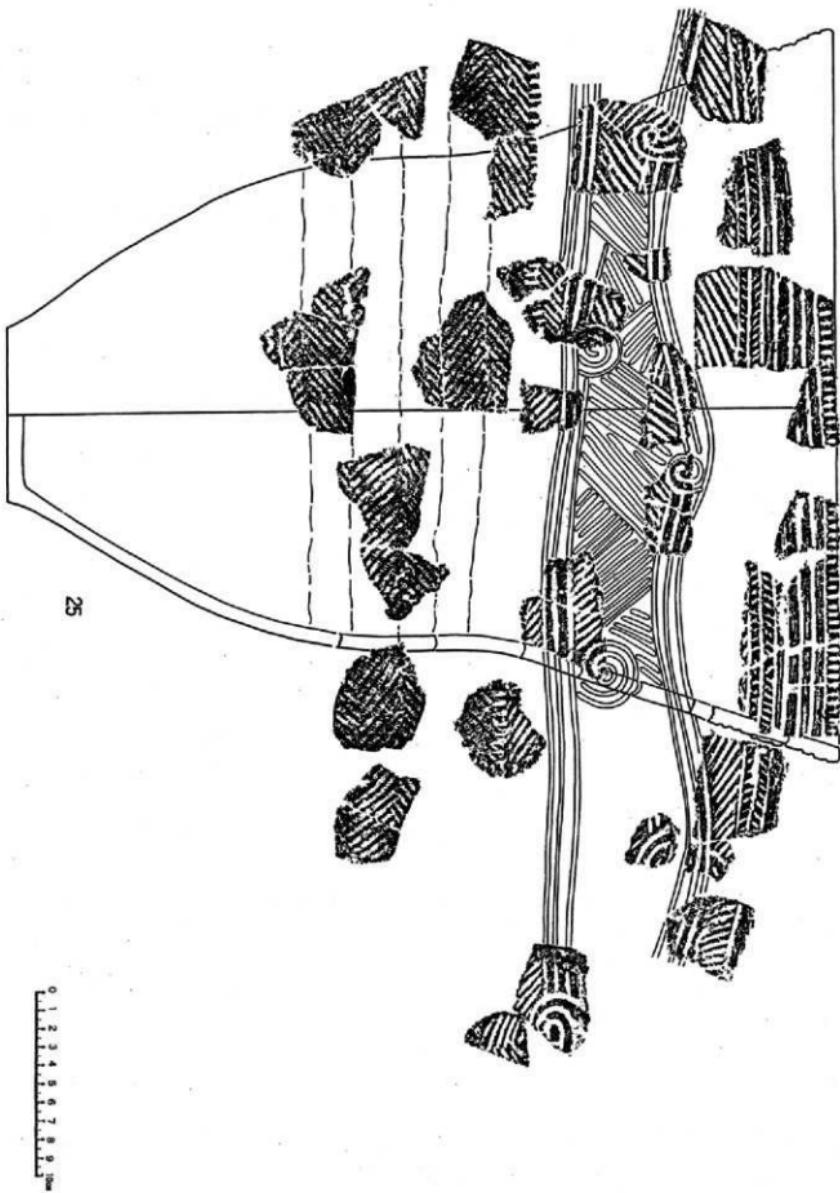


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10mm

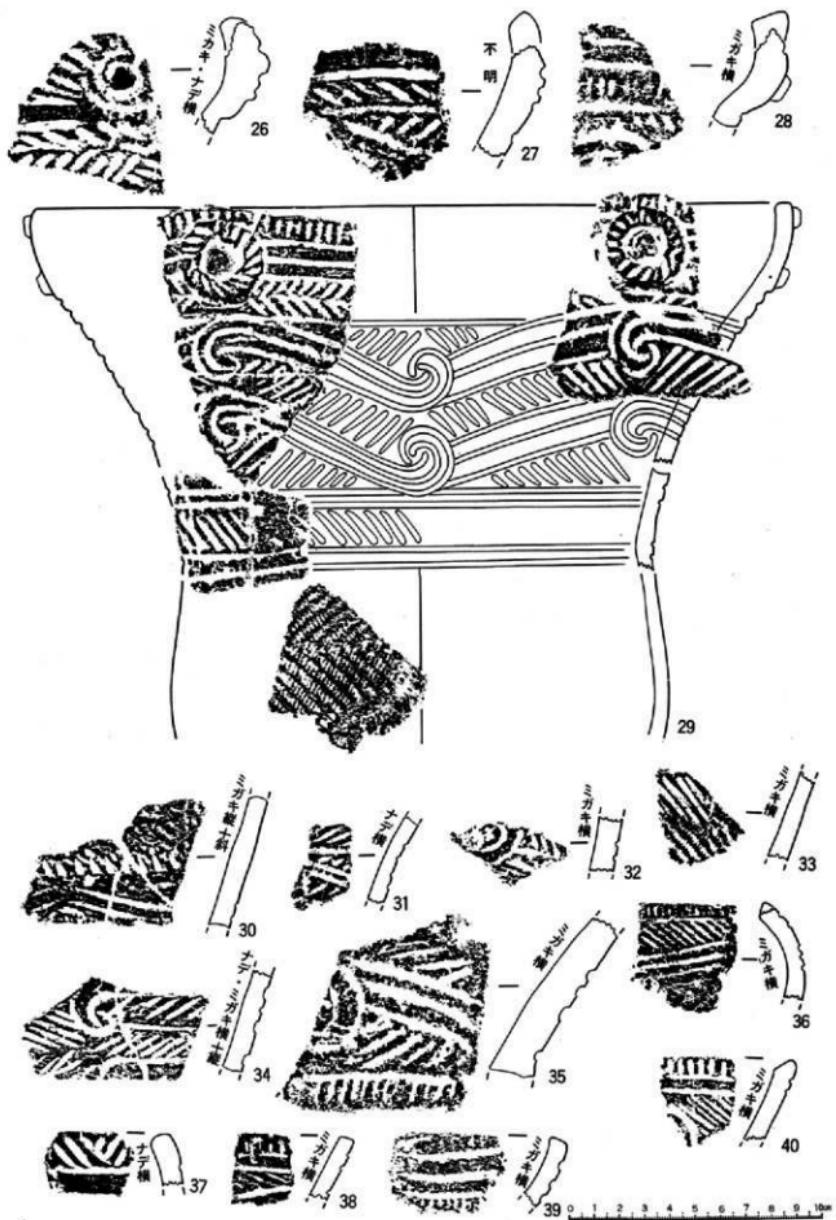
第14図 楢平遺跡出土土器拓影図(1)



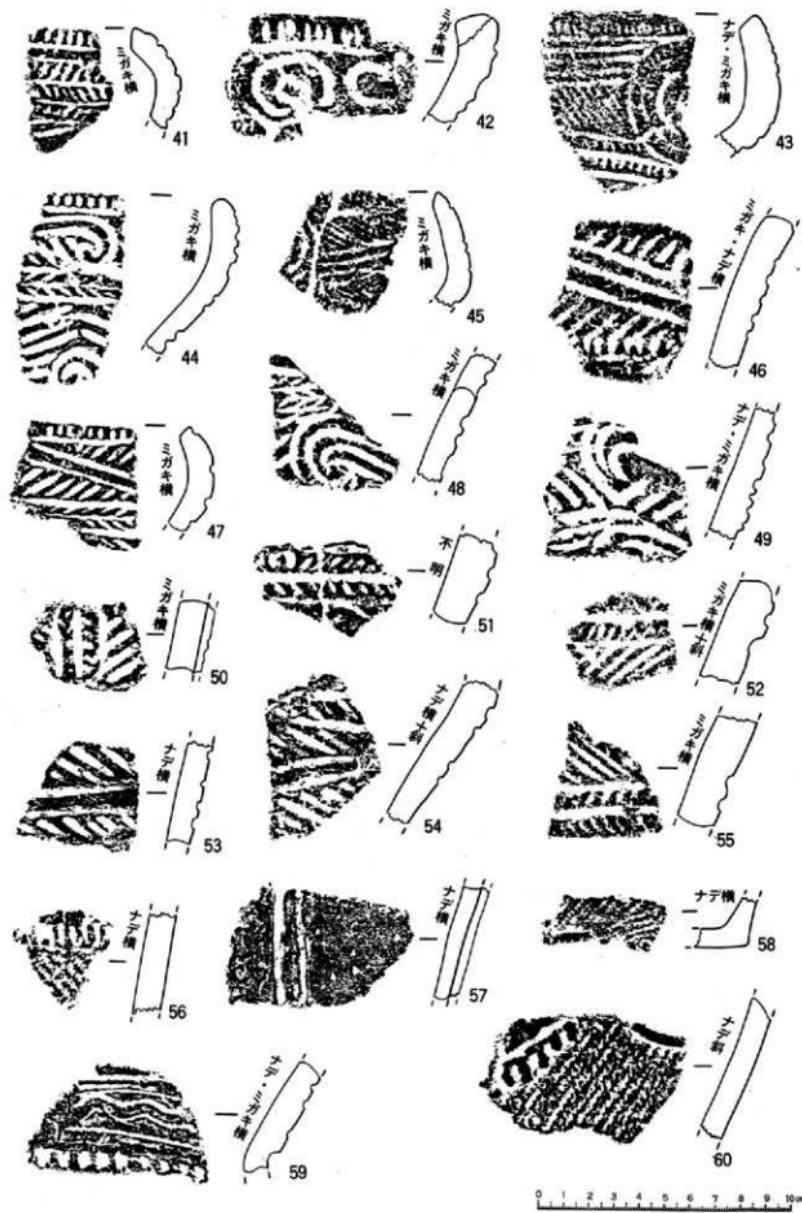
第15図 雄平遺跡出土土器拓影図(2)



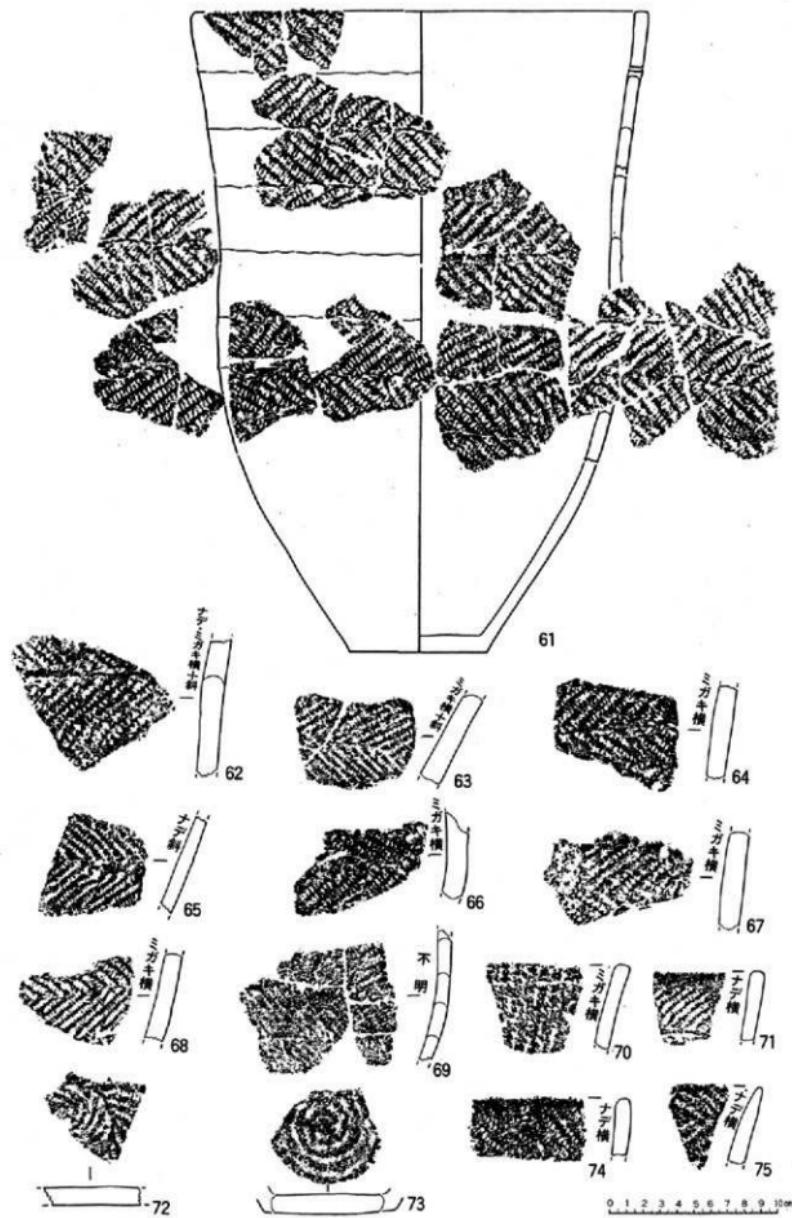
第16図 齋平遺跡出土土器拓影図(3)



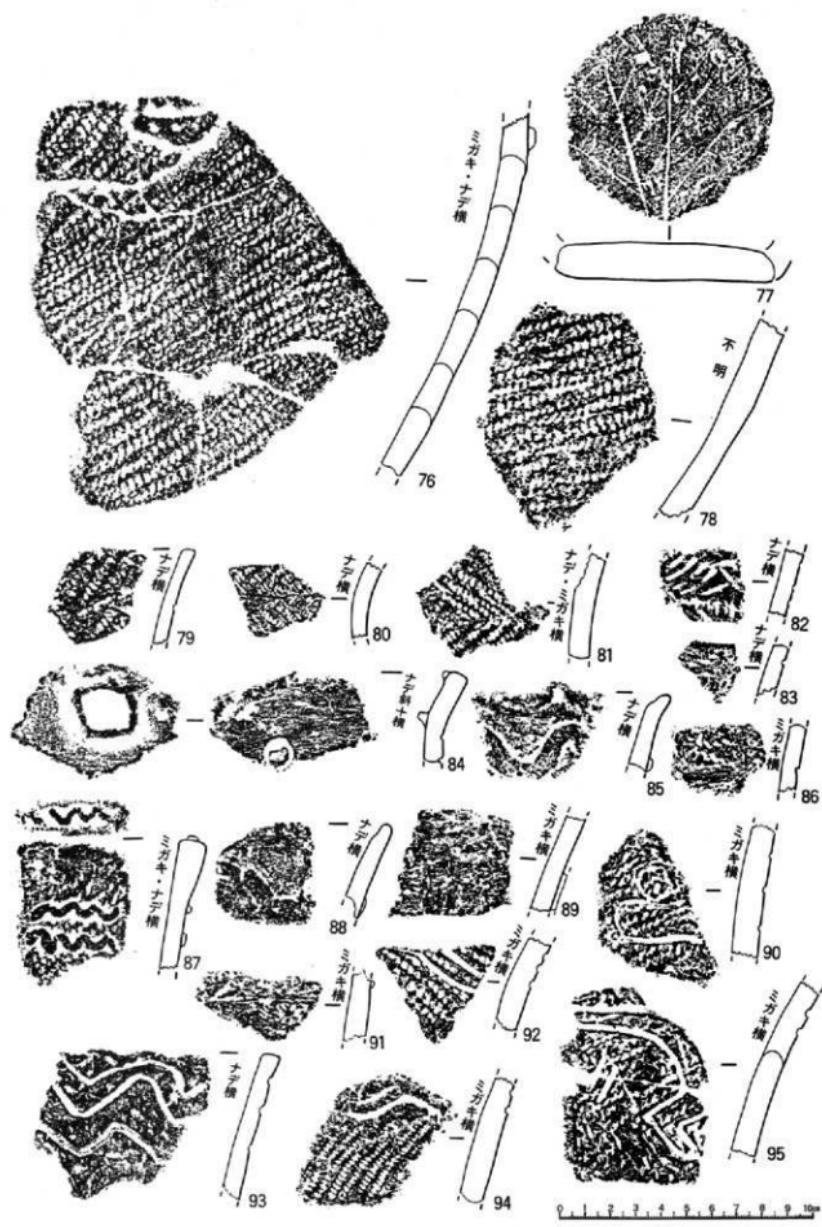
第17図 周平遺跡出土土器拓影図(4)



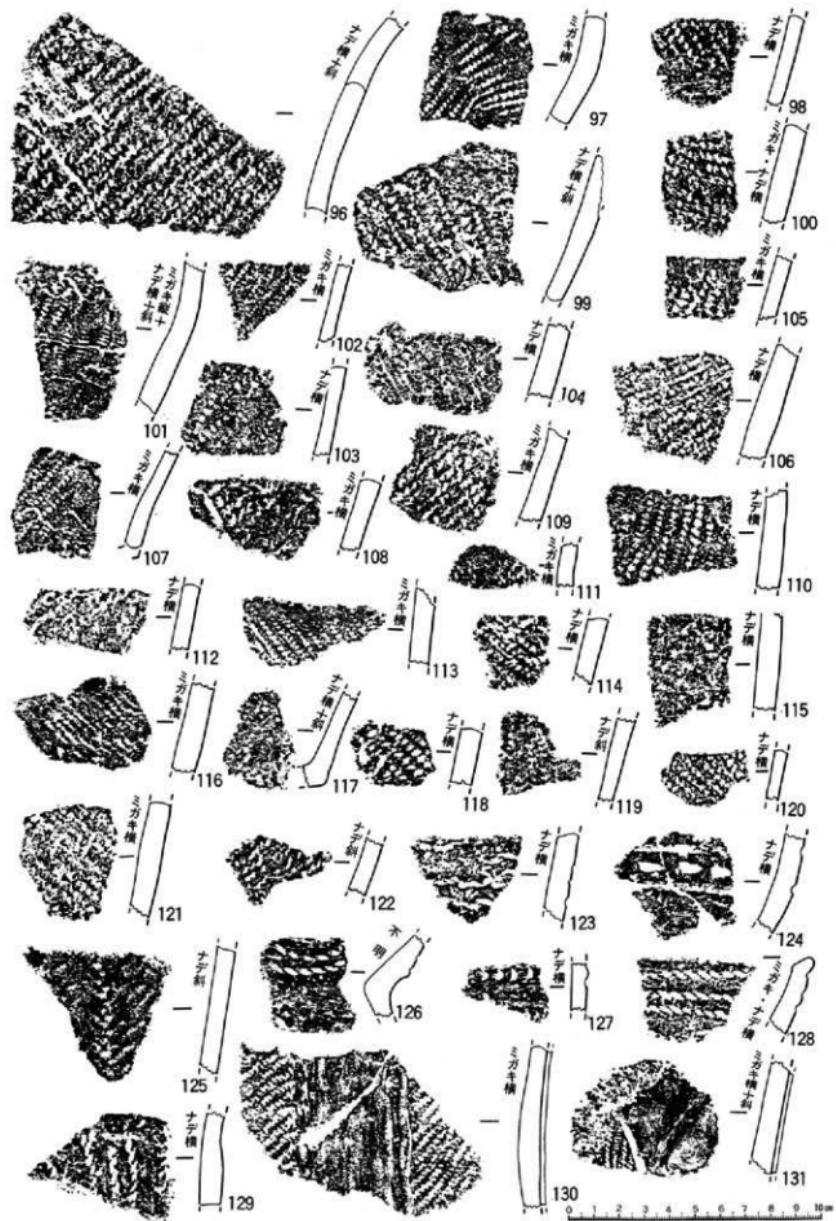
第18図 建平遺跡出土土器拓影図(5)



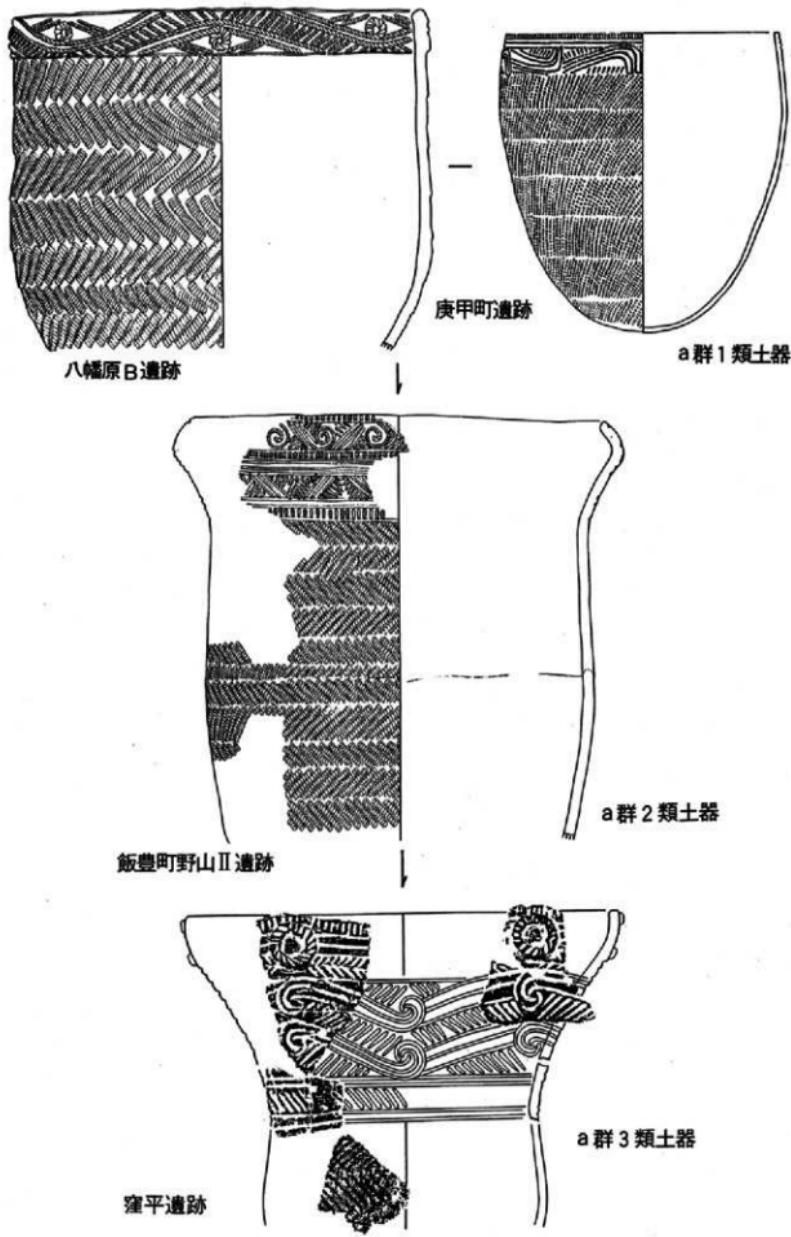
第19図 周平遺跡出土土器拓影図 (6)



第20図 塚平遺跡出土土器拓影図 (7)



第21図 窪平遺跡出土土器拓影図(8)



第22図 縄文前期初頭の土器実測図

写真図版



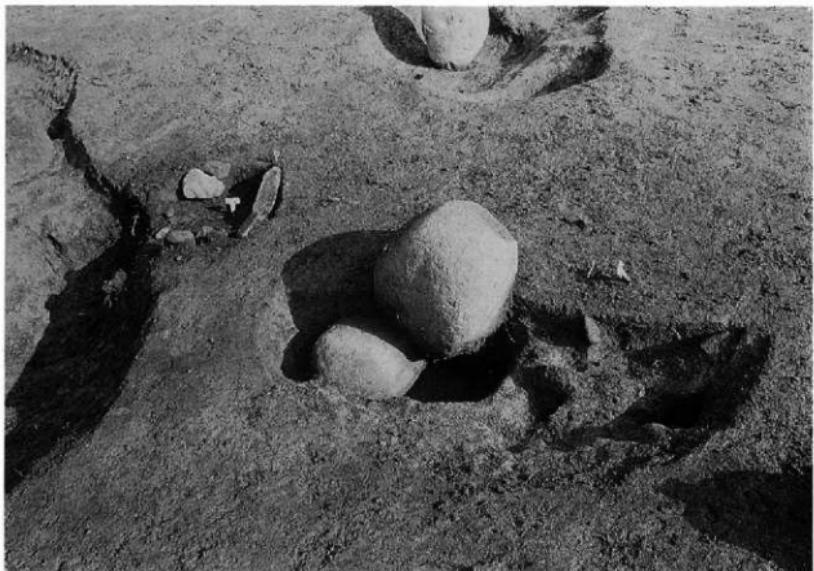
▲ 調査区全景（空中写真）



▲ 堅穴住居跡（空中写真）



▲豊穴住居跡全景（東より望む）



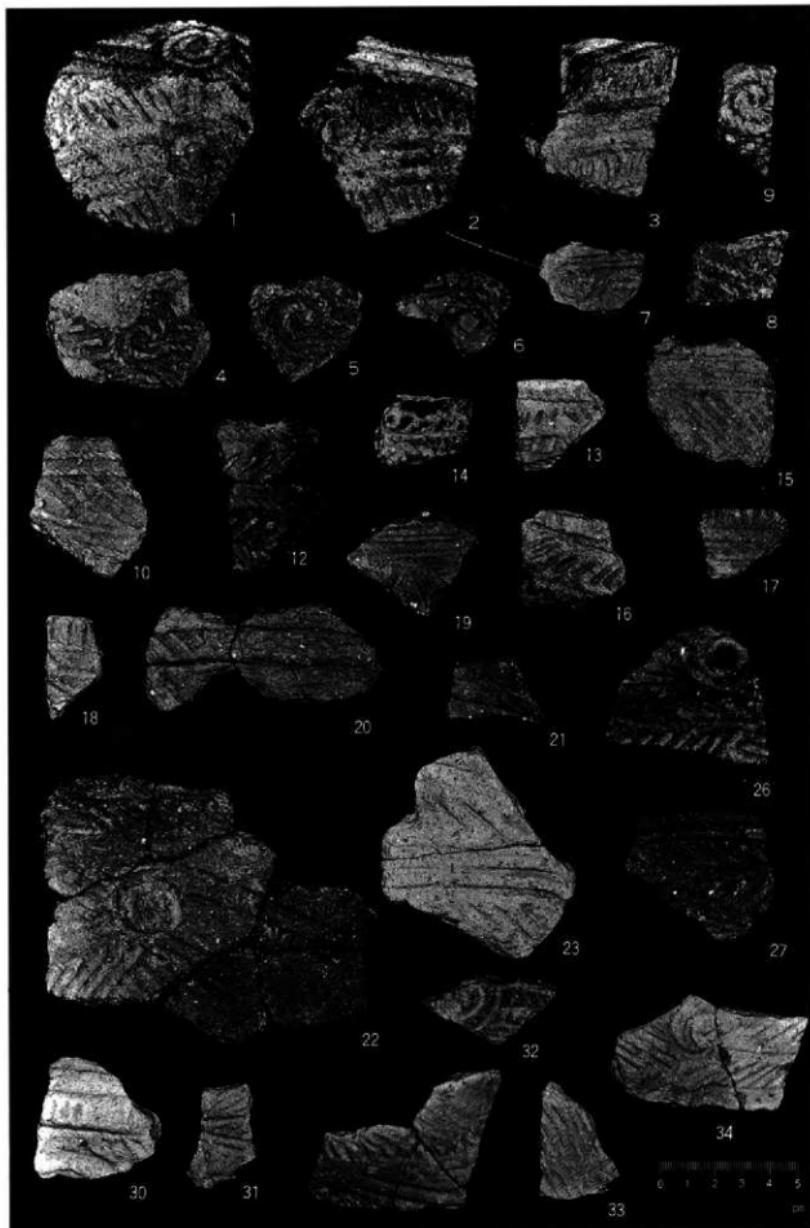
▲立石遺構完掘状況

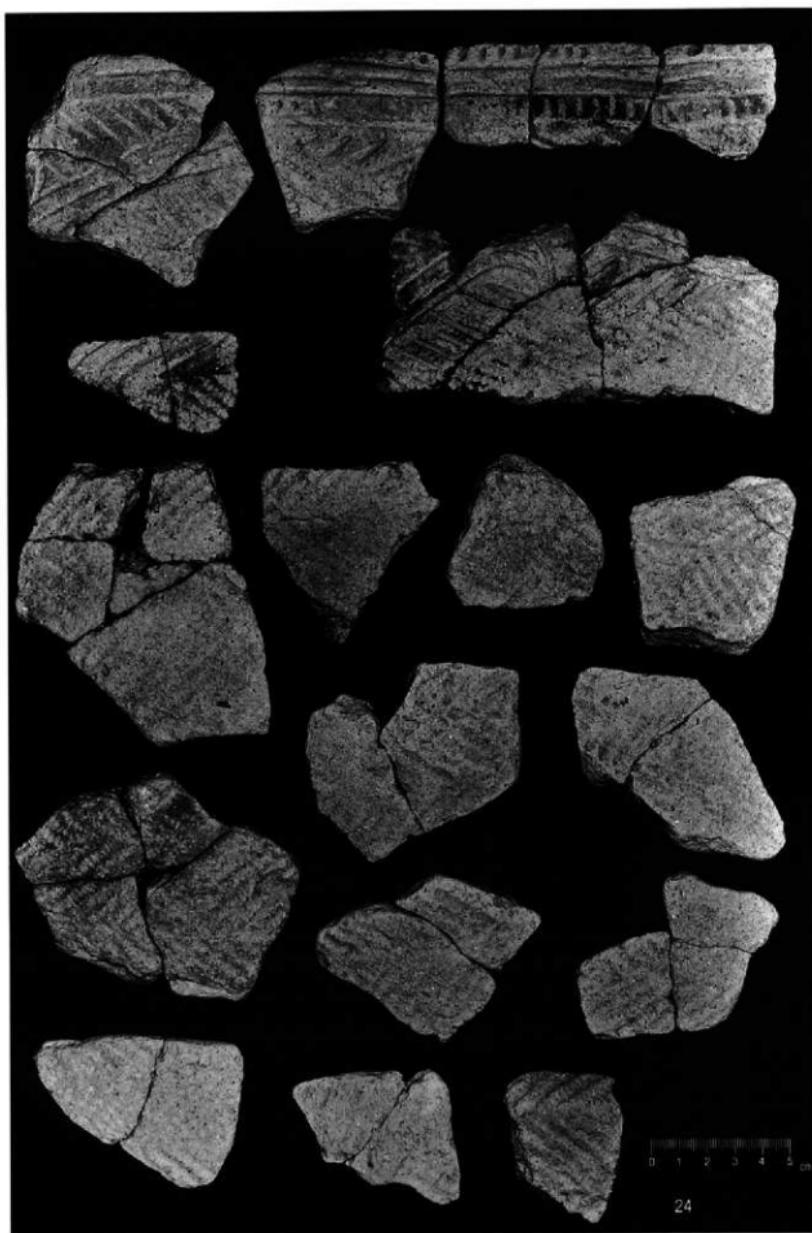


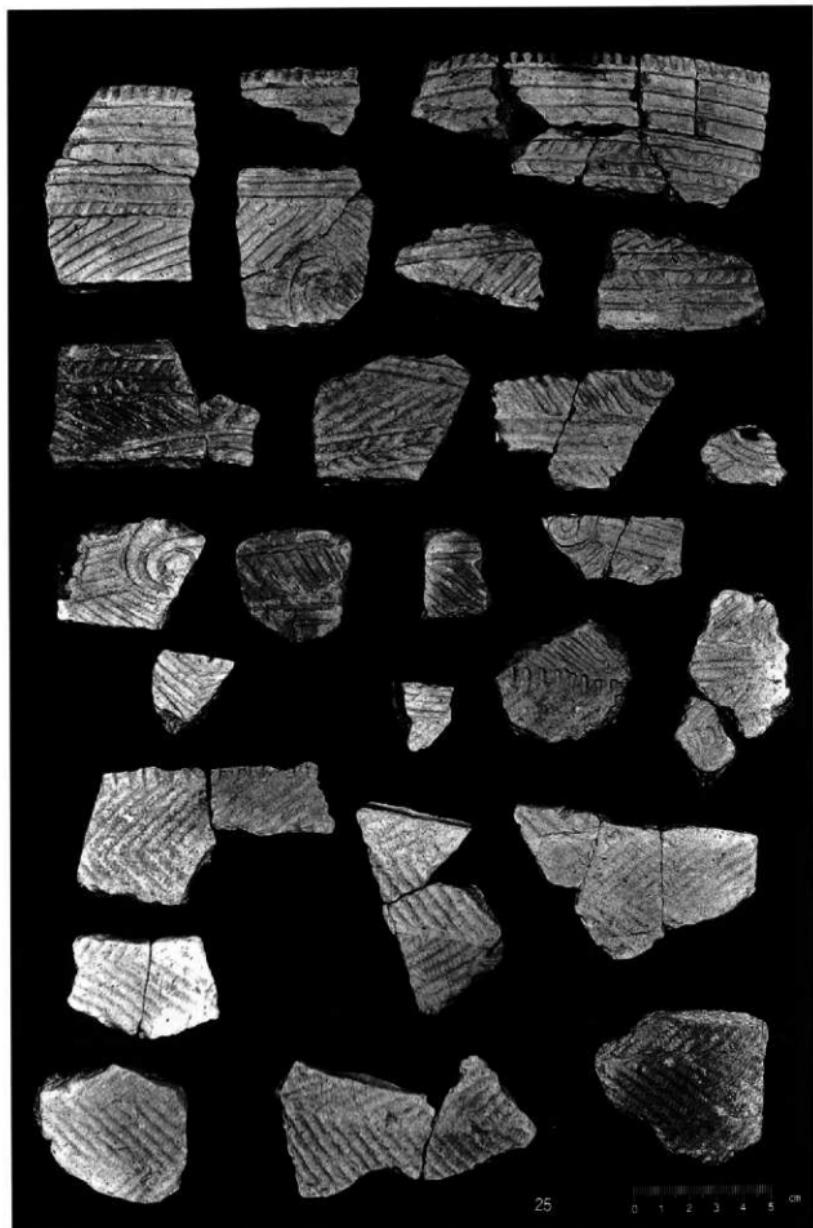
▲調査区全景（空中写真）

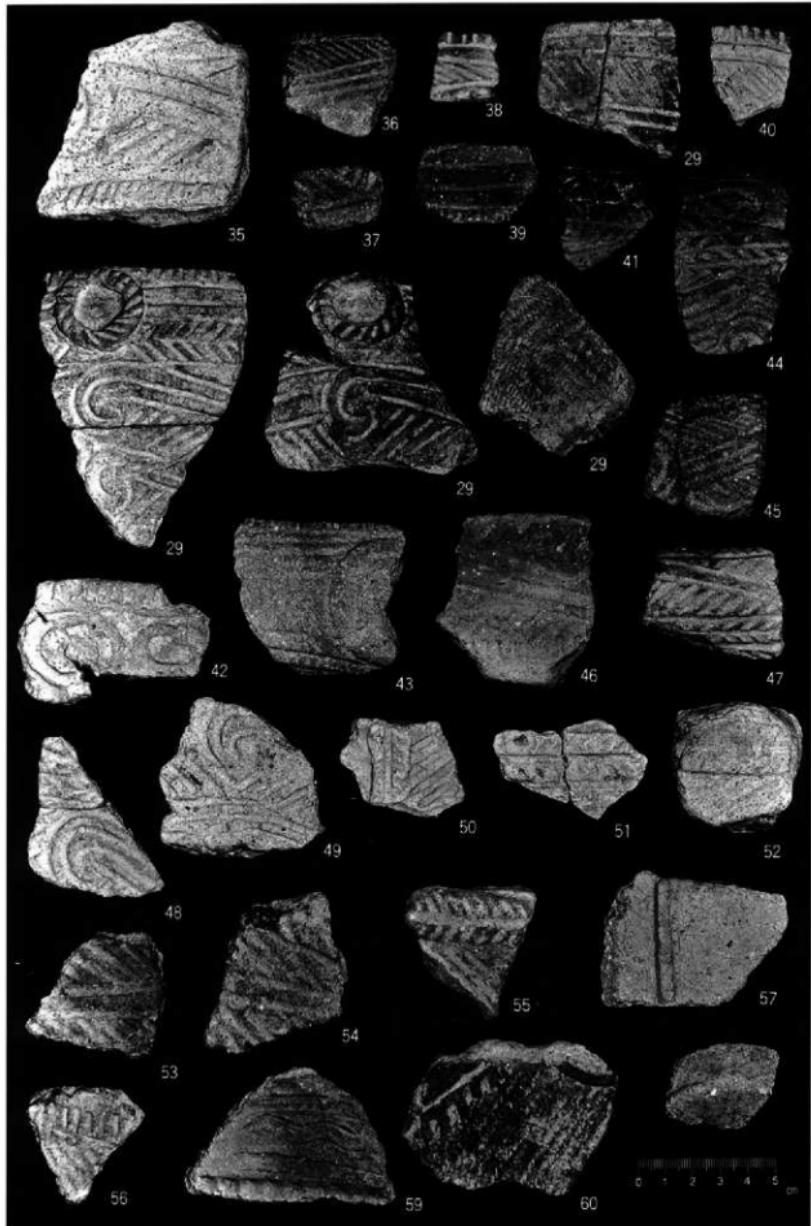


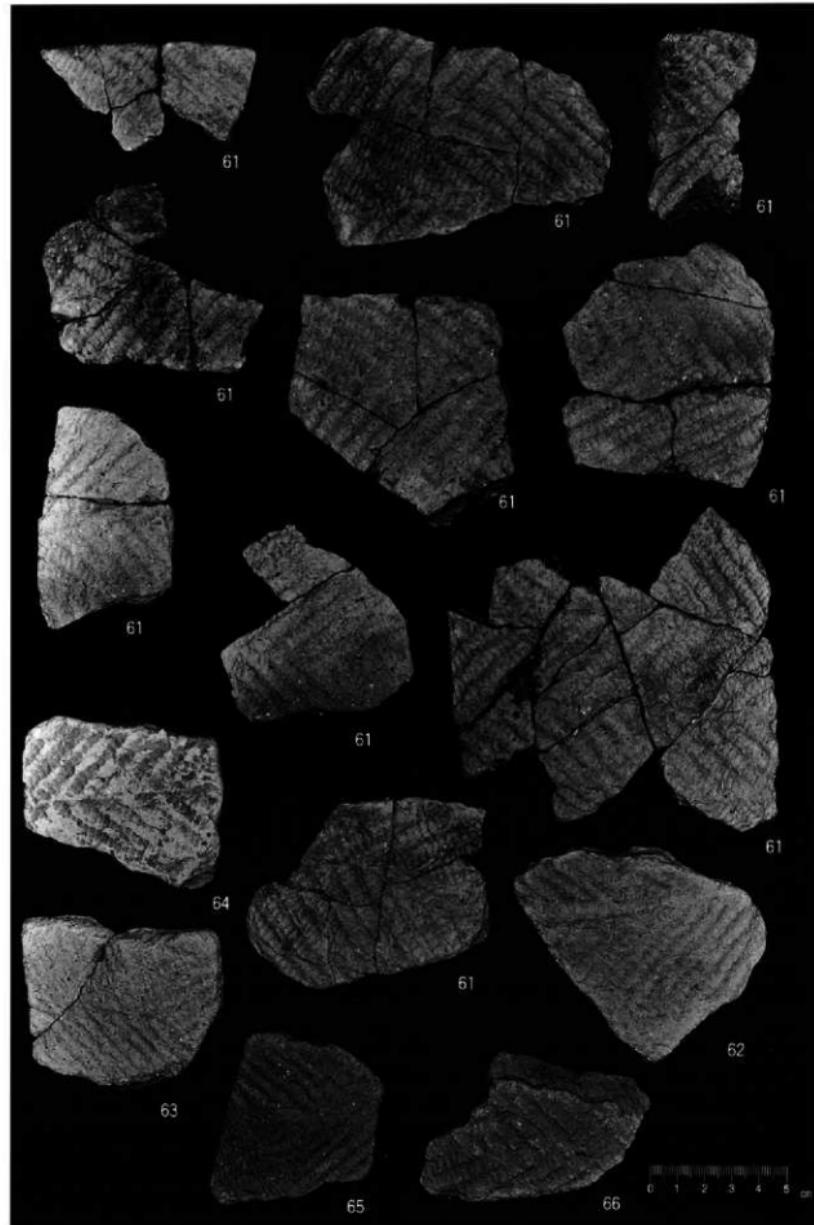
▲豊穴住居跡全景（空中写真）



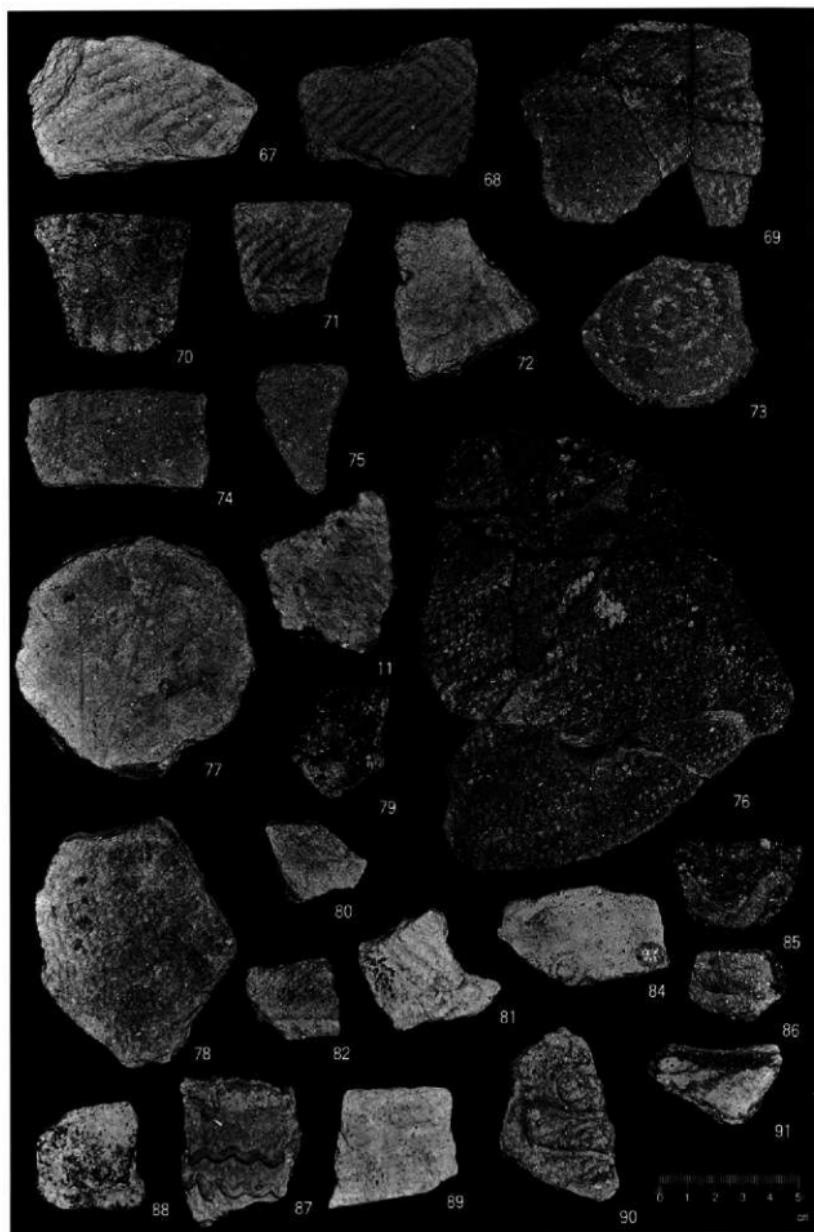


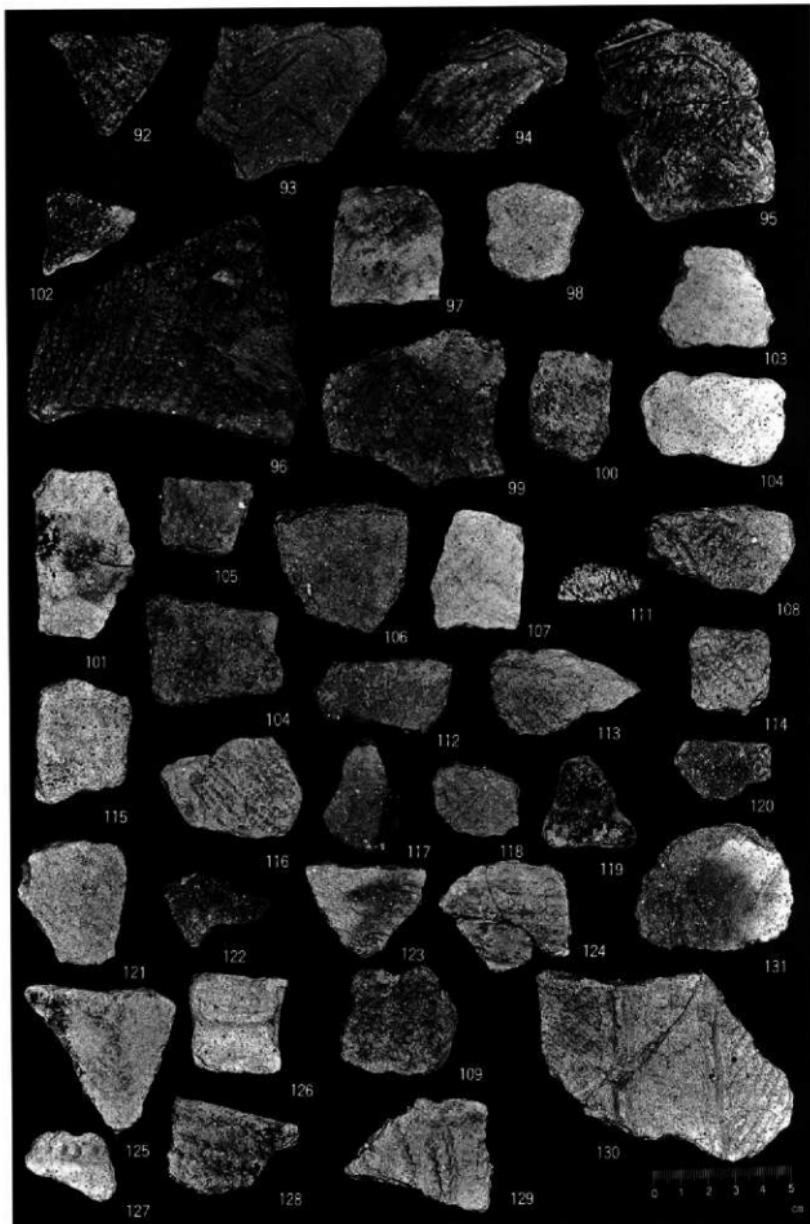


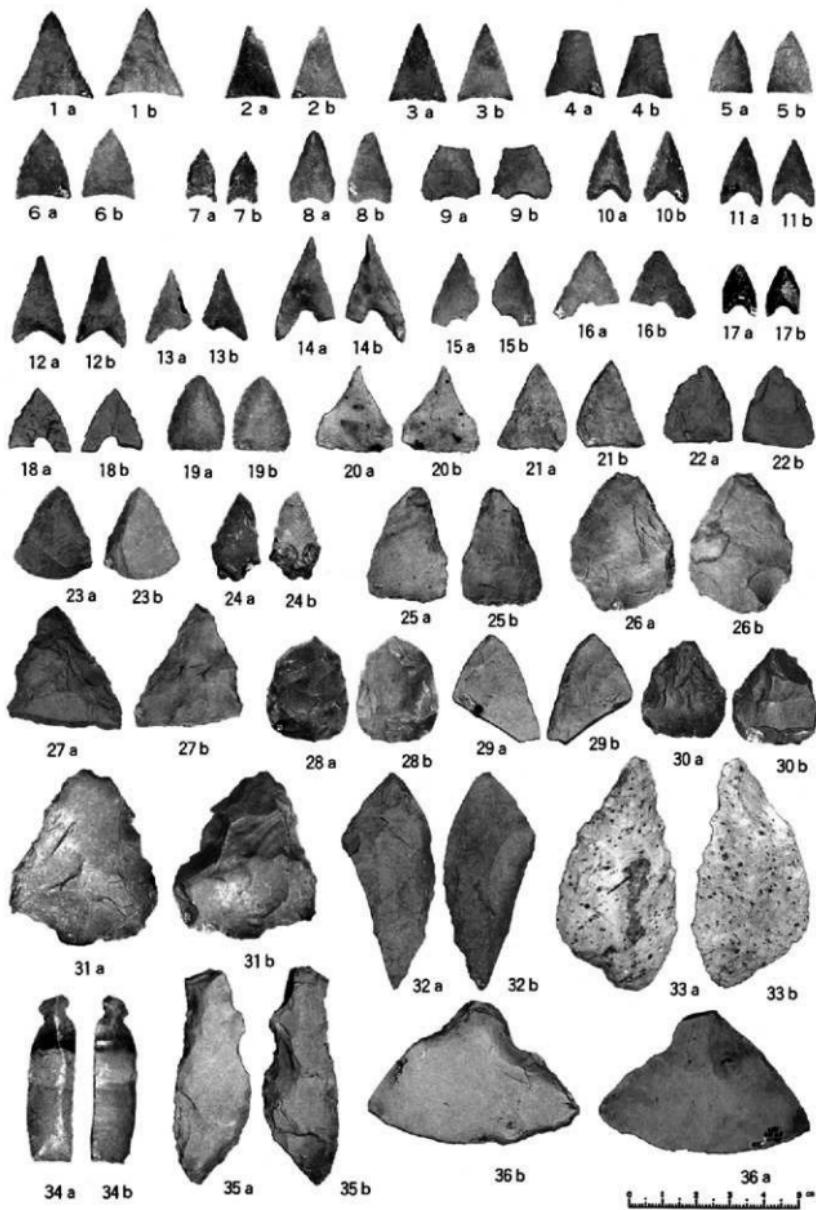




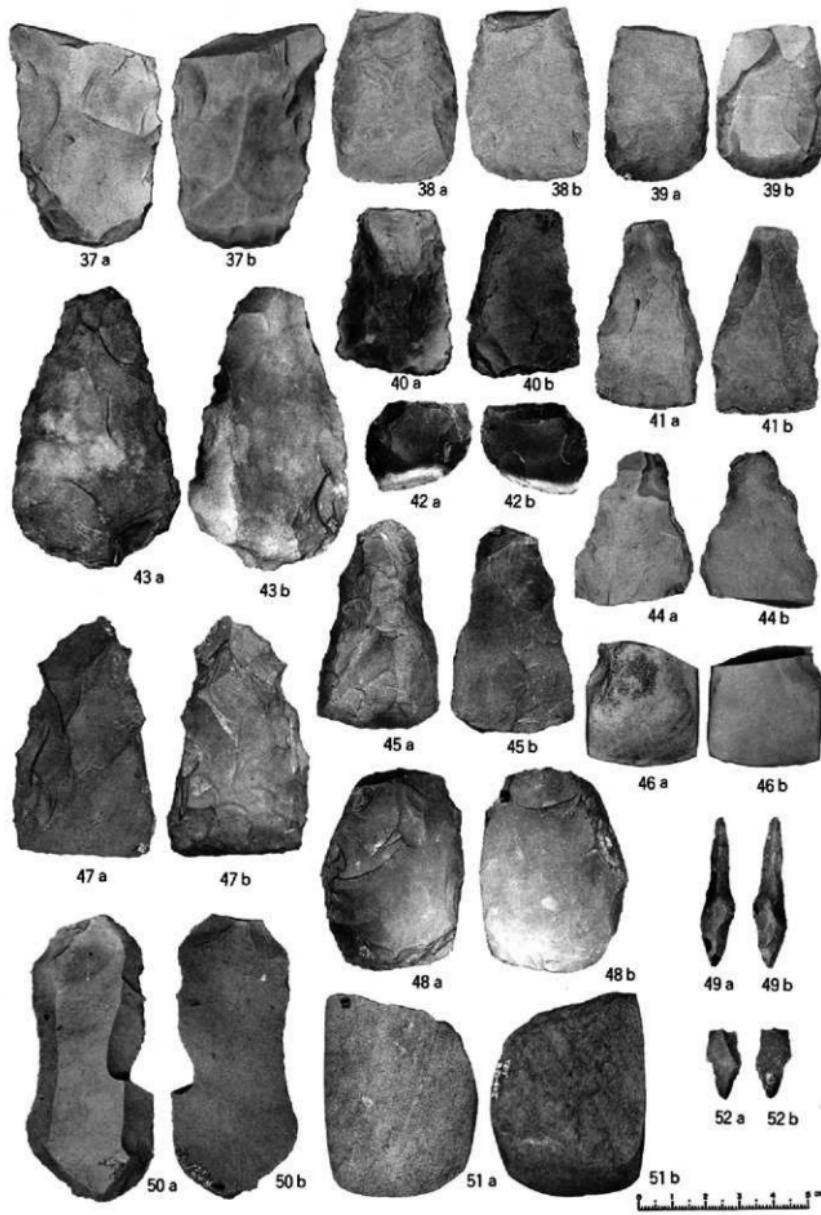
第九図版
窪平遺跡出土の土器
(6)

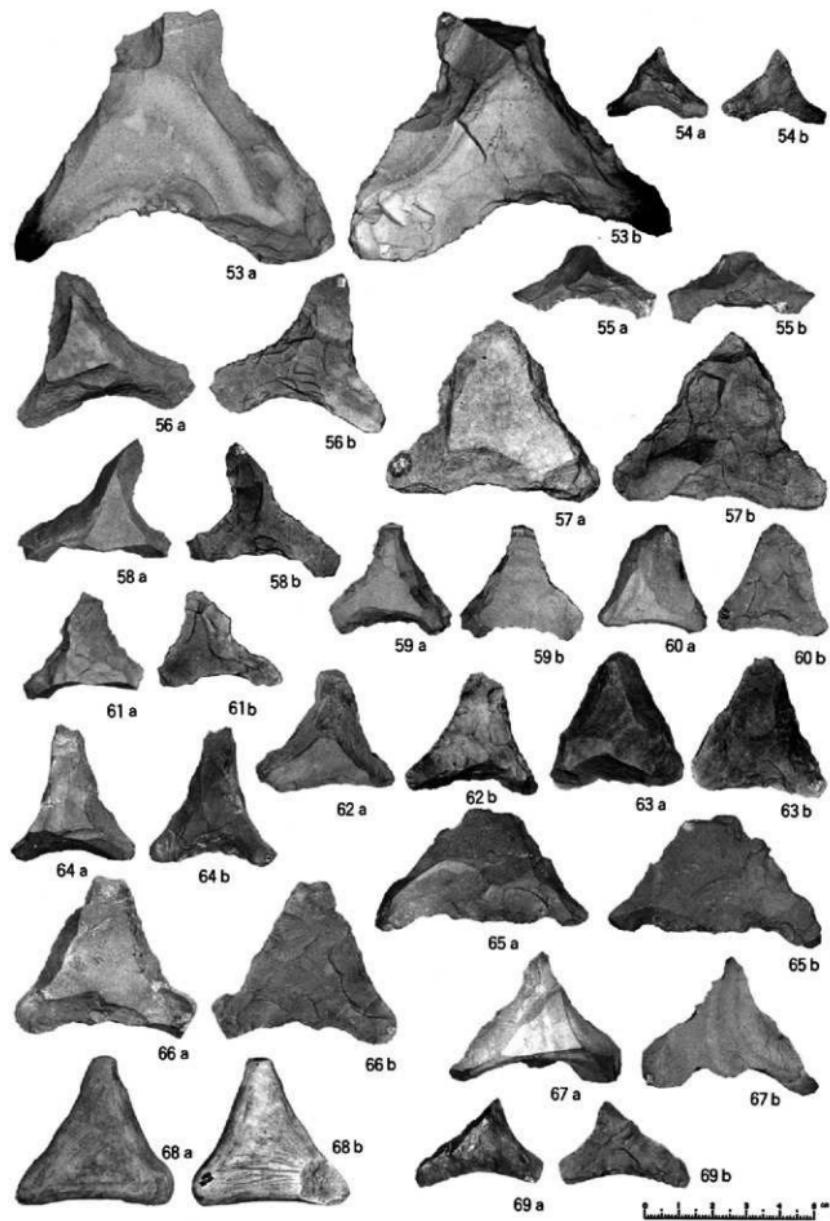


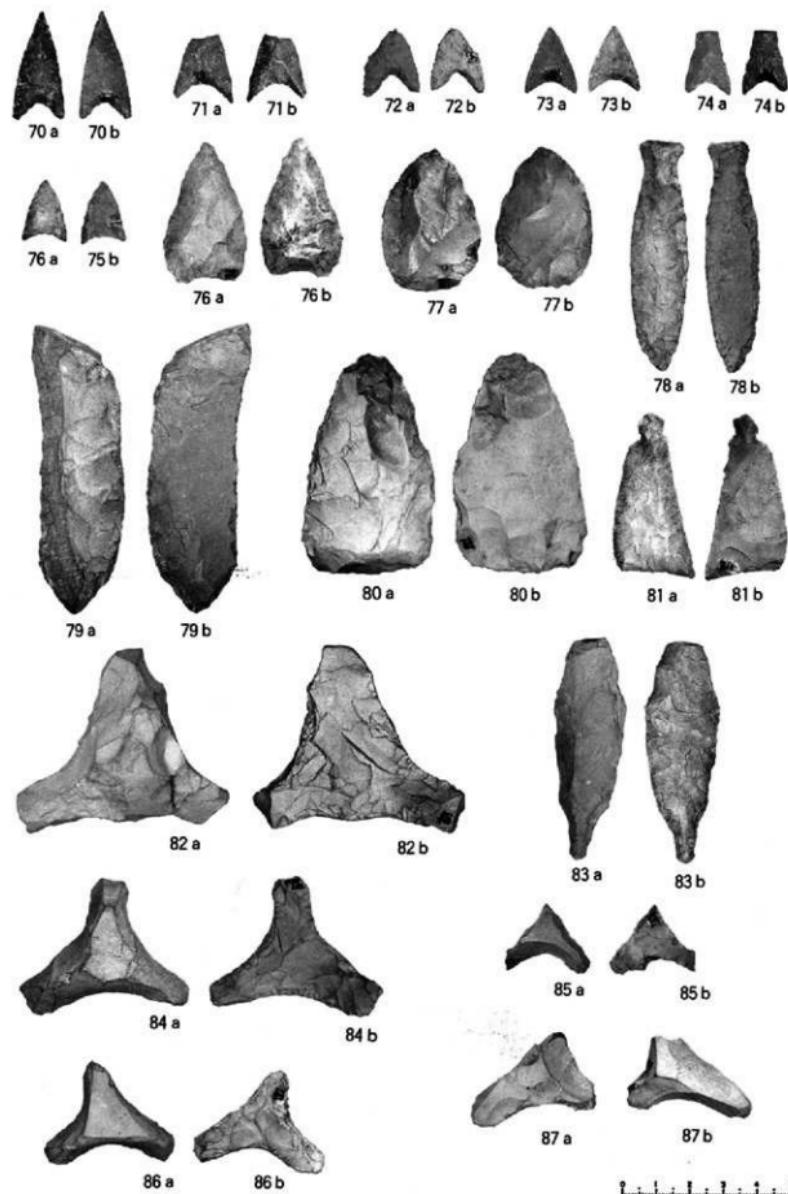




第十二図版 痛平遺跡出土の石器(2)







米沢市埋蔵文化財調査報告書 第46集

窟平遺跡調査報告書

平成3年3月25日 印刷

平成3年3月31日 発行

発行 米沢市教育委員会

米沢市金池三丁目1-55

TEL(0238) 22-5111 内線7504

印刷 タカノ印刷有限会社

米沢市泉町一丁目1番1号

TEL(0238) 38-5395